

---

# バカとテストと洞察眼

ぬぬぬぬぬ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと洞察眼

### 【Nコード】

N0481Y

### 【作者名】

ぬぬぬぬぬ

### 【あらすじ】

少し鋭い普通の高校生、火坂悠介。彼はいろんな危険が一杯のFクラスの中で、危険を察知し回避していけるのか？そんな話です。主人公は別にチートではないです。

## 主人公設定

### プロフィール

ほさかゆうすけ  
火坂悠介

16歳

男

2 - F所属

身長170?

体重52?

本作品の主人公。Fクラスの貴重な常識人であり、日々いろんな事があるFクラスに翻弄されている。得意科目は化学、物理等で、得意な理由は興味が持てたかららしい。逆に興味の持てない大体の教科は壊滅的な点数。ケンカはそれなりには出来るが雄二ほどではない。人の本質を読む能力に長けており、言動を少し見ていけばだいたいわかる。母が死んだ後父が再婚した継母を嫌っており、継母との関係は険悪。今はアパートでバイトをしながらの一人暮らし。

## 主人公設定（後書き）

どうも、作者です。

主人公の性格はあんまり決めてません。

悠介「なんで？」

作者「性格を設定したらいろんなやりたいことをやれないと気づいたんだ……。まあ性格はFクラスで過ごしながら形成されていくってことで、どう？」

悠介「おもつくそ手抜きじゃん！しかもあいつらの中じゃろくな人間にならんぞ！」

まあとにかく頑張っていきたいです。

## 第一問

ここは世界初の試験召喚システムを使用している文月学園。

桜の木が両端に並ぶ道を一人の青年がのんびりと歩いていた。

「おはよう、火坂」

顔を上げると、スポーツマン風の背の高い先生が立っている。

「おはようございます鉄じ・・・・・・・・鉄人先生」

俺は一度つかかったものの、面倒くさいので訂正をせずに西村教諭の愛称？で呼び返事をする。

「一度止めたならそのまま言うんじゃない。それに先生をつければ

いいというものでもないぞ。」

すると鉄人こと西村から意外とももの柔らかな返事が帰ってくる。そこで、

「どうしたんですか？化け物にしては優し過ぎませんか？何か変な物でも食べましたか？なんでそんなに肌が黒いんですか？」

と、目の前の非人間をいたわってみ……おっと最後つい日頃の疑問が。

「口の悪さは相変わらずだな馬鹿者が……。まあいいそれよりお前……。大丈夫なのか？」

「大丈夫かとはあの事ですか？別に僕の人生に1ミリも影響はありませんよ。」

「お前な……。いくら何でも3ヶ月近く無断欠席を続け、しかも母親が失踪したと聞いたんだ。心配せずにいられるか」

鉄人は俺の発言に怪訝な顔をする。

「息子を置いて出ていくような母親なんていてもいなくても変わりませんよ。それに元々あのゴミ以下の女に母親としての感情を抱いたことはねえ。」

あの母親・・・・・・・・いや、血のつながらない継母は三ヶ月前に父が死ぬとその二週間後に家を出て行った。別に悲しくはない。元々あいつには家族としての愛情を抱いたことはなかったし、あっちだつてそうだったろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「気にする事はありませんよ。オレの中では割りきつてる事です。」

「そうか・・・・・・・・済まなかったな・・・・・・・・。まあこれから学園生活を目一杯楽しむといい。お前のは・・・・・・・・これだ。」

鉄人に気にする事はないと言うと、鉄人は申し訳無さそうにしながら茶色い封筒を渡してくる。

恐らくクラス分けの封筒だろう。

しかし鉄人に人を心配する心があるとは・・・・・・・・

「お前今俺に失礼なことを考えているな？」

「いえ、そんなことは。」

くっ、こいつは人の心を読めるのか？さすがは人外なだけある・・・  
・まあそんなことよりクラスはどこだろう？予想はつくけど。

『火坂悠介 Fクラス』

まあそんなもんだろうな・・・総合は1100点ぐらいだし・  
・・

7

ああ・・・なるべく平和でおとなしいクラスだといいなあ・・・  
・・。

そんなことを考えながら、オレ水上悠理は2 Fへ向かった。

これから待ち受ける数々の災難も知らずに・・・

## 第一問（後書き）

どうも、作者です。

主人公、口悪いですね。作者はどっちかと言うと礼儀正しい主人公が好きなんですがなんでこうなったんだろ・・・

## 第二問

「何だこの教室は？・・・・・・・・・・。」

オレが思わずそう呟いた原因は2年Aクラスの教室。

リクライニングシートにノートパソコン、個人エアコンに冷蔵庫まである。多少の事では驚かない性格のつもりだが、この設備には思わず足を止めて見いつてしまう。

こんな設備なんてアリか？確かに注目の試験校だからスポンサーも多数ついていると聞いてはいるが・・・

オレが2 Aの前で立ち尽くしている間にも、Aクラスの生徒が教室に入って行く・・・・

あの子可愛いけど残念な胸だな・・・・・・・・

おっところしちやいられないな。とつとFクラスにいかないと。

またゆつくりと歩き出しながら目に入る教室を眺めて行く。

Bクラスは・・・結構広いな。Aほどではないが。でも室外機もついているし、モニターもある。これならFもわりと普通の設備かもな・・・上位クラスがこんなに豪華なら・・・・。

Cクラス・・・・まあ少し大きい“いい教室”って感じか？設備もまあまあ・・・・

Dクラス・・・・は少し古いけどまあ普通だな・・・・うん。ん

？この時点で少し古い？しかもDの次はF．．．ではなくEを挟むだと？更に2ステップか？ふざけんな！

Eクラス．．．．．ん？机や椅子に金属が使われてないな．．．茶色一色な教室だ。オイオイEがこれってことはFクラスはどんな設備なんだよ？あ、ヤベ想像したくない。

さて、次がFか？

どうしよう確認したくない．．．。回れ右してまっすぐ帰りたい．．．。

ええい！オレも男だ！例え腐りかけの机と椅子だとしても関係ない！青春を謳歌してみせる！

そう決心しオレは2 Fと書かれた教室のドアに手をかけた。

### 第三問

アレ？ここってどこだっけ？ちょっと待て落ち着こうアレ

ここはオレが在学している文月学園の2年Fクラス。紛れもないオレの教室……………。

そして目の前には腐った畳、脚が折れた卓袱台、綿が出ている座布団……………。

最悪だ……………。

オレは腐りかけの机と椅子でも我慢しよう！……………とか思っていたのに、机も椅子もねーじゃねーか！廃校寸前の小学校でもまだまじな設備しとるわ！

しかもなんだあの黒い覆面をして鎌を研いでいる集団は……………？オレの幻覚？そうであって欲しい！

……………はあ……………オレ疲れてるんだな……………。

だから「異端者……………」とか「死の制裁を」とか聞こえるのも幻聴なんだ……………断じて幻聴だ！

そうオレが必死に現実逃避をしていると、

「お前が火坂悠介か？」

赤毛の背の高い筋肉質の男がオレに話しかけてきた。

今は現実逃避で忙しいんだが……………。まあ無視するのも新学期早

々失礼か。

「ああそうだが、なぜオレの名前を？つかアンタ誰だ？」

「オレはこのクラスの代表の坂本雄二だ。お前の名前は一年のときから知ってる。まあ戦力確認ってトコだ。」

「戦力確認ね・・・オレは戦力になりそうかい？」

「オイオイ謙遜すんなよ。お前の成績はわかってる。」

「オレ総合で1100点ぐらいだぞ？」

オレなんて戦力にならないと坂本に伝えようとするが、

「ああ、それは知っている。そして科学と物理の点数もな。」

と、坂本がにやけながら言うてくる。

坂本はオレの得意科目の点数も知っているのか？

「まあ試召戦争では期待しているぞ。」

「ちっ、オレは参加しないつもりだったんだが・・・・・・面倒くさ。」

そう言って近くの席に座りホームルームが始まるのを待つことにする。

すると、

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

茶髪の生徒が教室に入ってきた……

「早く座れ、このウジ虫野郎。」

罵倒された。

いきなり人をウジ虫扱いとは……口が悪い坂本……。

そして今入って来たやつ……なんだコイツは？

今まで会ったどの人とも違う……？

この間の抜けた顔、かなりバカそうな印象……いや、確信に近いものを感じる。人の本質を察するのはなぜか昔から得意だからな……。まず間違いないだろう。

そうオレが考えていると、

「……雄二、何やってんの？」

目の前のバカ（そう呼ぶことにした）が坂本を下の名前で呼んでいる。

やっぱりなんかバカっぽいな．．．って坂本！そいつ友達かよ！  
友達に会った第一声がウジ虫かよ！

はあ、変な奴ばっかだこのクラス．．．。  
声で分かったがその黒覆面、クラス同じだった須川だな．．．。  
そう言えば去年、須川の机をふと覗いたら同じような覆面があった  
ような．．．。

オレこのクラス唯一の常識人かも．．．

そう思いはじめた。

### 第三問（後書き）

どうも、作者です。

ようやく雄二と明久登場。主人公は明久のバカさを見抜きました（笑）。原作キャラと絡めるのは難しいです（苦笑）。

#### 第四問

このクラスの担任……福原先生が来てホームルームが始まっていた。

このクラスの担任とはアンタ大変そうだな……

オレがそんなことを考えているとクラスはいつの間にか自己紹介タイムに突入

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

ん？こりやまた可愛い……っーかなんかどっかで見たよーな？……気のせいかな。んで男子の制服……ってアイツ男！？でも可愛い……って男だって！

「……というわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

木下の自己紹介が終わり小柄な男子生徒が立つ

「………土屋康太」

今度はなんか寡黙な奴だな。ん？アイツのポケットにあるデジカメと大量の写真はなんだ？まあ彼にも事情があるのかもしれないと思いたい出来れば。

「……です。海外育ちで、日本語は会話ができるけど読み書きが苦手です」

あれもう次か？土屋は名前だけか。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は」

この声は女子か？見渡す限り男子だから女子は貴重だな……

「趣味は吉井明久を殴ることです」

なんだそのバイオレンスな特定された趣味は！？そして マークはそんな言葉につけるものじゃないつ。

「はろはろー」

アレ？こつちに手を振ってる？……いや違った。いつの間にかオレの隣に座っているさっきのバカだ。「おいバ、吉井って言ったか？あのバイオレンス女お前の知り合いか？」

隣のバ、もとい吉井とやらの聞いてみる。

「うん一応去年同じクラ……今僕のことバカって呼ばうとしなかつ「気のせいだ」そう……。まあとにかく彼女は知り合いで僕の大敵だよ。あ、次は僕だね」

順番が回って来て吉井が自己紹介を始める。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

『『『ダアアー リー ン！』』』』

う……なんつー大合唱だ……。気分が悪くなる。このバカなん

て自己紹介を・・・吉井も吐きそうだな・・・。まあ許してやるか。おっと次はオレかな？今みたいなこともあるし、簡単でいいや・・・。

その後は（オレも含め）名前を告げるだけの作業が続き、オレが暇すぎて空はなぜ青いんだろう・・・なんて考え始めた頃、ガラリとドアが開き胸に手を当てた女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

『えっ？』

おや？アイツはたしか・・・

「ちょうどよかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

そうだ、あの学年次席の姫路瑞希だ！でもなんで・・・

「はいっ！質問です！」

あ、誰かが聞いてくれるっぽい。

「なんでここにいますか？」

聞きようによつては失礼な質問だが、学年次席がFクラスともなれ

ばまずでてくる率直な疑問だろう。かくいうオレも気になる……  
・ん？吉井がなんか複雑な顔をしてるな。吉井はしってるらしい。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

なるほど。途中退席は0点扱いだからな。少し厳しいがしかたのないことだろ……

『そう言えば、俺も熱一（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？　アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩彼女が寝かしてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

しかたのないバカばかりだ……。。

## 第五問

「き、緊張しましたあゝ・・・」

さつき自己紹介した姫路がバカと坂本の間に座る。

お前その二人の間に座るのか？その二人は（特に吉井）オレの中では最上級危険人物だぞ？

「あのさ、姫」

「姫路」

あ、バカが姫路に話しかけたら坂本に遮られた。

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

坂本の自己紹介に姫路が丁寧に答える。もしかしてオレ以外の常識人がいるのか！？

自分以外の常識人と思われる生徒に興味が生え、彼らの会話に耳を傾ける。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

バカが口を挟む。

「よ、吉井君!？」

バカを見て驚く姫路。何にそう驚いたんだ？

「姫路。明久がブサイクですまん」

坂本がフォロー……。違った。そのバカを追いついたただの暴言だった。つかそのバカは結構美少年だぞ？

「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ……。」「むしろ……。？何？まさか……。」

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え？それは誰」

「「そ、それって誰ですかっ!？」」

そのまさかだったな……。でも今の本人は自覚なさそうだ。姫路は厳しい恋路になりそうだな……。

あり？目を離れた隙に吉井が声を殺して泣いてる。なんでだろ？

「はいはい。その人たち、静かにして下さいね」

福原先生が覇気のない声で警告する。

バキィッ      バラバラバラ……

あ、教卓が木屑に変身した。今の軽い叩きで壊れる教卓に何を載せるんだ？そんなん・アレ……上手い例えが見つからない。

そんなことを考えてると、

バカが坂本に話があるようで二人で廊下に出て行く。少し聞いてみるか……

「      それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし      おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

「あ、うん」

なるほど？バカは姫路のために設備を変えてやりたいとな？あのバカにもいいところがあるじゃないか。今度からはちゃんと吉井と呼ぼうか？

オレが自分の中の吉井評価を改めているとまた自己紹介が始まっていた。ん？次は坂本だな。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

坂本がゆつくりと教壇に歩み寄る。その姿にはふざけた雰囲気は皆無で代表としての貫禄が見られた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

代表といってもF代表じゃオレらと大差ないがな……

「さて、皆に一つ聞きたい」

オレはこいつに単なるF代表以上のなにかを感じる。今も上手く間をとることでほぼ全員が坂本の話に引き込まれている。

坂本は皆の様子を確認し、視線を教室内の各所に移す。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて全員が坂本の視線を追い、それらの備品を眺める。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

一呼吸。

「不満はないか？」

『『『『大ありじゃあっ!!』』』』

ちょ、うるさい。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ!』

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ!改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ?あまりに差が大きすぎる!』

不満の聲が次々とあがる。やはり坂本の人を動かす才覚は本物かもしれない。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

不敵に笑う坂本。この話の流れ……やるのか？

「  
FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思  
う」

## 第六問

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

坂本がAクラスへの宣戦布告を切り出す。

「勝てるわがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらない」

案の定そんな夢物語は無理だという声――（最後は違う）があがる。  
オレも正直いくら姫路がいてもAクラスには勝つのは難しいと思う。  
なにしろAクラス代表の学年主席霧島翔子は、姫路以上の点数なのだ。  
姫路を除くFクラス全員でかかって勝てるかどうか？

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たしてみせる」

しかしそれを知りながらも坂本はAクラスに勝てると言う。

「何を馬鹿なことを」

「できるわけないだろう」

「何の根拠があつてそんなことを」

否定的な意見が続出する。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

そう言う得意の不敵な笑みを浮かべ、何人かのクラスメートを見る。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・・・・・・・・！（ブンブン！）」

ん？さっきの無口な奴か？あんなに思いっきり覗いてたのに今さら否定すんなよ・・・・・・・・・・あ、頬の畳の跡も隠してる。

「土屋康太。こいつがあ有名な、ムツツリーニ《寡黙なる性識者》だ」

「・・・・・・・・・・！（ブンブン）」

あいつがああのムツツリー二なのか？確かにまだ頬の畳の跡を隠そうとするあたり、本物だろう。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその実力はよ

く知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している。」

確かに学年次席がいるだけでかなりの戦力になるだろう。

「木下秀吉だっている」

次にさっきの美少女？の木下の名前が出る。オレはよく知らないが、成績優秀な姉や演劇部のホープだということでは有名らしい。

「当然俺も全力を尽くす」『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

クラスの士気がガンガンと上がっていく。さあ坂本、もう一押しだ！

「それに、吉井明久だっている」

あ、そっちに持って行くんだ……。

明久side

「それに、吉井明久だっている」

・・・シン

クラスの士気が一気に下がる。

オチは僕かよ！ここで僕の名前を挙げる意味なんてないだろ！

「ちょっと雄二！どうして僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを　　ってな　　んで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

最近雄二が友達と呼んでいい関係なのかわからなくなってきた。

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは「観察処分者」だ。」

ちよつと！それは言わなくてもいいでしょう！僕がバカだって皆にばれたらどうするんだ！

「観察処分者ってなんだっけ？」

しめた！まだ観察処分者の意味がわからない人もいる！今ならまだごまかせ……

「バカの代名詞だ」

うぎゃあ！隣の人から致命的な台詞が！て言うかさっきこの人僕をバカって呼び掛けた人だよね？

「ちよつと！僕がバカだって皆にばれちゃうじゃないか！」

隣でやる気の無さそうな生徒に小声で話しかける。

「大丈夫だ。俺はちゃんと一目見たときお前の真の人物を見抜いた」

「え？本当？」

やっぱりわかる人にはわかるんだろう。僕が唯のバカじゃないってことを。

「お前は正真正銘のバカだ」

「ちよつと！それは僕の真の人物像がただのバカだってこと！？」

悠介 side

隣の観察処分者を少しけなしてみた。こいつはいろいろと面白いなあ。

『おいおい。』

「観察処分者」ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?」

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

オレたちが話している間に皆の間でも話が進んでいく。

「気にするな。どうせいてもいなくても同じような雑魚だ」

坂本……お前最初から吉井を貶すために吉井の名前出したのか? 鬼だな……

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな?」

吉井……坂本にはフォローするつもりは毛頭ない。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すっごい大胆に無視された!」

「吉井・・・さっきはけなして悪かったな。少し同情してきたよ・・・と心にもないことを言ってみる」

「本音がだだもれだよ畜生!」

あれ?」の位置間違えた。しっかりしろよ作者!

「皆、この境遇は大いに不満だろう?」

『『『当然だ!』』』

「ならば全員ペンを持て!出陣の準備だ!」

『『『うおおーっ!』』』

なにはともあれついに俺達の試召戦争が始まった。

## 第七問（前書き）

一話から六話が改行多すぎに感じたのでやっと全部修正しました。  
疲れますね・・・

## 第七問

坂本が気焰を上げ、ついにFクラスの試召戦争が始まった。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらう。無事大役を果たせ！」

坂本・・・絶対無事には大役を果たせんぞ・・・。下位クラスの使者はボコられるのが普通だ。

「・・・下位勢力の使者つてたいてい酷い目に遭うよね？」

お、気づいた。

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思つて行つてみる」

お前は本当に騙す気だろが。

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思つている」

オレは友達を迷いなく騙す最低な人間だと思う。

「大丈夫、俺を信じる。俺は友人を騙すような真似はしない」

あ、吉井は友人だと思ってないんだ。

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

そう言うと吉井は胸を張って教室を出ていく。吉井……お前は本当にバカなんだなあ……。

「火坂、心配なら行って助けてやればどうだ？」

坂本がオレにも行くかと言ってくる。愚問だな。オレの答は決まってる！

「断固拒否、だ」

「お前はそういうヤツだと思ってたよ」

アレ？なにもしてないのに何この悪人扱い。

十分後

「騙されたあつ！」

あ、吉井。生きてたみたいだ。

「やはりそうきたか」

「やはりつてなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか。なっ火坂？」

「まあな。そんなことも予想できないやつはただのゴミだな」

「少しは悪びれるよ！そして火坂君！他の人をゴミ扱いだなんて君は人間のゴミだ！」

じゃあお前は二重の意味でゴミだな。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫？」

「平気だよ島田さん。心配してくれてありがとう」

おいおい可愛い女子二人に心配されちゃって幸せなやつだな……。

「そう、良かった。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！もうだめ！死にそう！」

ごめん吉井。お前は安息という言葉とは程遠い人生になりそうだな。そして島田、お前は吉井をどうしたいんだ？もしかして今流行りのツンデレ？とすると島田の想い人は……。

「おし、今からミーティングを始めるぞ。火坂、お前も来い」

「はいよっ」

少し確認したいこともあるし……ま、外れてる気はしないけど。

「おい、島田」

「何？えつと……」

「火坂悠介だ。よろしく」

「火坂ね？こちらこそよろしく。それで、何か用？」

「ああ……お前吉井のことが好きなのか？」

「なっ！なによあんた一体！いきなり何を言い……」

「あー、もーいーよ。その反応で誤魔化せる方がおかしい」

「くっ……本人には内緒にしないよ！」

「そんな野暮なことするかよ。見守ってやるから安心しろ」

「そう?・・・ならいいけど」

つまりこいつは好きな人にあんな暴力的なこと言ってるのか?こいつは吉井とどんな関係になりたいんだ……。そんな考え事をしているといつの間にか屋上に。・・・土屋、姫路のスカートはさっき覗いたんじゃないのか?

さて、ミーティング開始。

「明久。宣戦布告はしてきたな?」

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね?」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べるよ?」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「なんだ?吉井はいつもは何食ってたんだ?」

「おい木下、火坂悠介だ。まあよろしく頼む」

真相を確かめるべく、隣の木下に話しかける。

「うむ、よろしくなのじゃ。」

「ところで木下、吉井はいつも何を食ってるんだ？」

「明久かの？それは・・・あ、今話しておるぞ」

どれどれ？

「いや、お前の主食って 水と塩だろう？」

坂本の哀れむような声。え？そんな無機物しか食べてない状態でヒトは何日間生きられるの？

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

なぜその少ない仕送りを遊びに使い込む。

「・・・・あ、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」

「あ？」

お、姫路がアプローチ。

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外の食べ物なんて久しぶりだよ！」

お前のその発言はマジで笑えん。

「はい、明日のお昼でよければ」

「ありがとう姫路さん！」

「・・・ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

お？島田が妨害してきた。どうする姫路？

「あ、いえ！その、皆さんにも・・・」

「俺たちにも？いいのか？」

ん？なんだこのざわざわした感じ？

「はい。嫌じゃなかったら。あ、火坂君もどうですか？」

「あれ？姫路さんと火坂君って知り合い？」

「悠介でいいよ。まあ、去年同じクラスでな。」

「それでお弁当はどうですか？火坂君？」

ど、どうしよう。外から見たら羨ましい光景だけど、さっきからオレの中の危険を告げるブザーが鳴りっぱなしだ・・・オレの第六感が本能的に反応している・・・。震えが止まらない！

「どうしたのさ悠介？震えるほど嬉しいの？」

「い、いや吉井、オレは遠慮し・・・」

「火坂君ったらそんなに楽しみなんですか？じゃあ火坂君の分も作ってきますね！」

「あ・・・どうも・・・」

そんな眩しいぐらいの笑顔で言われたら断るにも断れないじゃないか・・・いや姫路を信じるんだ！彼女はFクラスの残り少ない常識人（オレ、木下、姫路）の一人じゃないか！現に七人分も弁当を作るというのに嫌な顔一つしない。こんないい子が作る弁当が不味いわけないよ！うん！

「本当にありがとう姫路さん。姫路さんって優しいね」

吉井が姫路に礼を言う。吉井には以外にも天然人たらしの才能があるのかも。

「そ、そんな・・・」

照れる姫路。・・・別に嫉妬じゃないけど、こののほほんとしたやり取りみてるとうぶっ壊したくなる・・・。

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「にしたいと思っていました」

明久・・・なに失恋回避成功！みたいな顔してんだ？失恋どころか変態になってしまふ自分の発言を聞いてたのか？

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

流石秀吉。ツツコミどころを的確に突いた上手いツツコミだ。オレとお前はこの物語の数少ないツツコミ役として過ごしていくだろう。精進してくれ・・・。

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

坂本・・・オレもさつきからお前と吉井に想像を超えたやり取りを見せつけられてる気がする。

「雄二。一つ気になっていたんじゃがどうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「まあな。色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

「吉井、お前の周りにいる面子を見てみる」

理解できてなさそうな吉井に助け舟を出す。

「美少女二人と馬鹿が三人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!？雄二が美少女に反応するの？」

「・・・・・・・・・・(ポツ)」

「ムツツリーニまで!？どうしよう、僕だけじゃツッコミきれない!」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニ」

「そうだ、吉井がオレをムツツリ扱いしたのは置いとして説明を続けよう」

「いや、悠介も間違ってるじゃないか！」

吉井が何か言っている。なに？ムツツリはオレじゃない？オレが美少女だというのは？失礼なやつめ！

「ま、要するにだ」

「姫路に問題がない今、Eクラスとやっても練習相手としての意味がないって意味だろ？」

オレが坂本に続けて言う。

「まあだいたい火坂の言う通りだな。それに打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「でも、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

吉井の心配を坂本が笑い飛ばす。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

面白そうじゃないか。オレも乗ってやろう！

「それじゃ、作戦を説明しよう」

久しぶりに楽しくなりそうだ。

## 第八問

「吉井！木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

同じ部隊に配属された島田が叫ぶ。

「よし！吉久！」

「了解！・・・ってそんなミックスな名前で呼ばないでよ！明久でいいから！」

「わかった。行くぞバカ久！」

「それはさっきより酷いからね！？」

「ホラ、吉井も火坂もさっさと行くわよ！」

コントをしているオレとバカ久を島田が急かす。ん？明久・・・島田をじっと見てどうした？

「ああ、胸か」

おい！そんな重量級の地雷踏まなくていいから！

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全文きれいに」

そして島田！すぐそういう発言が出てくる女の子は人生で初めてだよ！

「お、落ち着け島田、試召戦争に集中しよう！」

オレが島田を必死に宥めてる間に、報告係が走ってくる。

「火坂！前線部隊が後退を開始したぞ！」

え？もう？

オレたちがいるこの部隊は前線の援護を担当しており、前線部隊が点数を補給する間戦線を維持するのが役目だ。

「よし、明久、島田、行くぞ・・・って何逃げようとしてんだよ！」

「悠介、僕らには荷が重すぎだよ」

「そうよ火坂、ウチらは精一杯努力したわ」

「努力ってまだ敵の姿も見えてないだろ・・・ん？横田、どうした？」

「代表より伝令があります」

「『逃げたらクロス』」

「全員突撃しろおっ！」

坂本は本当にこいつらの扱いが上手いと思う。

「吉井、見て！五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴ら、化学で勝負するつもりね！」

「島田、化学は自信あるか？」

「全くなし、60点台常連よ」

「よし、それじゃあ五十嵐先生と布施先生に近づかないように注意して戦おう」

「ん、明久。その必要はないぞ」

「なんで？」

「理由をいうとな「お姉さまあー！」……なんだ？」

「ちよつと！やめなさい美春！」

ふと見ると髪をツインのロールにした女子が島田に抱きついている。  
も、もしかしてリアルGL？

「よし。島田さん、ここは君に任せて僕は先をいそぐよ！」「ちよつ……！普通逆じゃない！？」  
『ここは僕に任せて先に行け！』  
「じゃないの！？」

「そんな台詞、現実世界じゃ通用しない！」

やれやれ……こいつらの仲はなんなんだか。

「吉井、逃げる必要はないぞ。試獣召喚！」  
サモン

オレの足元に幾何学的な魔方阵が現れ、柄の長めな槌を持った召喚獣が出てくる。

「美春とお姉さまの邪魔をする豚野郎は全員殺します！試獣召喚<sup>サモン</sup>！」

え？何この子・・・こわ・・・

『Dクラス      清水美春      94点』

でも今は生身じゃなくて召喚獣のバトルだ！恐れる必要はない！

「行くぞ！」

オレの召喚獣が清水の召喚獣めがけて突っ込み、巨大な槌を振り降ろす。

ガキイツ！

清水の召喚獣が刀で受け止める。

「火坂！美春はDクラスなんだから正面から行ったら不利よ！」

島田がオレに警告をする。

「大丈夫だ」

ピシッ、バキン！・・・

次の瞬間、清水の刀は二つに折れていた。

『火坂悠介      Fクラス      化学      368点』

「え？え？武器が・・・」

「これだとめだな」

清水の召喚獣の頭めがけて槌を振り降ろす。

ゴン！

おういい音。生身でやったのなら頭蓋が碎けた音だな。

『Dクラス　清水美春　0点』

「戦死者は補習！」

うわ、鉄人が清水を担いで運んでる。

「お、お姉さま！美春は諦めませんから！このまま無事に卒業できるなんて思わないで下さいね！」

物騒な捨て台詞だなオイ。

「そしてその豚野郎！美春の邪魔をしたことを絶対に後悔させてやります！首を洗って待つてなさい！」

え？オレ？オレが悪いの！？

なんか無駄に恨みを買った気が……

「火坂……アンタそんな化学点数高かったの？」

「あん？今回は少し調子が悪くてな。400は行かなかった。」

「調子悪くてあの点数なんだね……」

「さて、オレは一旦教室に戻るぞ」

「え？なんでさ？」

「坂本にあまり点数を見せんなって言われてんだよ。まあ次の試召戦争のことを考えてだろ」

「そうなんだ。じゃあお疲れ様」

「ああ。そつちも頑張れよ」

そう言うとおレは教室に向かう。ん、だいたいわかったけどまだ操作のコツはつかめないな……。坂本がおレを少しだけ出したのは召喚獣操作に慣れさせる意味もあるんだろう。まあとにかく今回のおレの役目はこれで終わりだ。後は頼ん・・「死になさい、吉井明久！試<sup>サモン</sup>獣召喚！」　「誰か！島田さんが錯乱した！本陣に連行してくれ！」・・・吉井、死ぬなよ・・・！

「おーす。戻ったぞ坂本。」

「おう。召喚獣の操作感覚はどうだ？」

「まだコツはつかめないけど、だいたい慣れた。自分より低い点数の相手なら負けることはないだろ。」

「そうか。それなら十分　どうした須川？」

「おお坂本。数学の船越を戦線から遠ざけないといけないんだ！なにか策はないか？」

「なるほど？・・・よし、須川これだ」

「この紙の内容を放送すればいいんだな？」

「そうだ。頼むぞ須川」

坂本が嫌な笑みで須川になにか命令すると、須川は放送室の方に走っていった。

「坂本、須川に何をたのんだんだ？」

「聞いてのお楽しみだ。」

なんかその笑みを見ると全然楽しみにならないんだが・・・。  
あ、またオレの警報ブザーが鳴ってる。靴ひも確認、出口確認、よし！

ピンポンパンポン

お、始まった。

『船越先生、船越先生』

さあどうするんだ？

『吉井明久君と火坂悠介君が体育館裏で待っています』

え！？それは反則だろ！

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

畜生！婚期を逃して生徒に単位を盾に交際を迫るような船越女史にそんなことをしたら・・・・・・・・オレの貞操の危機じゃないか！坂本、許すまじ！

「甘い坂本・・・」

「なんだ火坂、速く逃げなくていいのか？」

にやりと笑う坂本。馬鹿め！貴様も一緒に地獄に来てもらおう！

「あばよ坂本！童貞卒業おめでとう！」

放送室にダッシュだ！

「なんだと？何を言って・・・・・・・・ちよつと待て！」

「おつと坂本。代表が軽々しい行動をとっていいのか？」

「くっ・・・・・・・・」

代表という立場を利用して坂本を止める。坂本、終わりだ！

ピンポンパンポーン

全校放送にするか。

『数学の船越先生。Fクラス代表の坂本雄二君がついに意を決して船越先生と幸せになりたいそうです。旧校舎の空き教室で婚約書を持って待っています。すぐに行ってあげて下さい』

おし、復讐成功。どこかで坂本の悲鳴が聞こえる。一緒に地獄へ行こう坂本……。

旧校舎にだれかの狂ったような笑い声と、どっかの代表の悲鳴が鳴り響いた。

その後はオレは戦争には加わらず、話によると姫路がDクラス代表を200点差で瞬殺したらしい。皆！初勝利おめでとう！坂本！新婚おめでとう！

## 第八問（後書き）

どうも、作者です。

悠介「最後思いつきがかつさばいたな」

作者「んゝ、いろいろ考えたんだけどなんか原作と大差ないしいいかなって」

悠介「この作品まだ全体的に原作通りだろ」

作者「まあ船越女史の標的に悠介と雄二も加わったぐらいだよね」

悠介「そうだよ！どうしてくれんだ！」

作者「これを機に船越ルートに変えるとか？」

悠介「ちよつと待て、変えないならだれの予定なんだ？」

作者「え？もう出てきたよ？」

悠介「？」

まあヒロインはBクラス戦の後に本格的に登場させようと思ってます。上手く出来るかわかりませんがお楽しみに！

あとなかなか評価や感想等もらえませんか・・・。評価はともかく、感想はあった方が嬉しいです・・・。悪い部分、おかしい部分などの指摘でも構いませんのでなにか感想が欲しいなあ。面倒だと思いますが書いてくれると嬉しいですな・・・。

## 第九問（前書き）

今回は難しかったです……。姫路の弁当編は……。

## 第九問

なんで・・・

なんでそんなに幸せそうに笑ってた？

オレたちもう会えなくなるんだろ？

アンタ死んじゃうんだろ？

『悠介！』

なのに・・・

なんで・・・！

なんでそんなムカつくぐらいの笑顔をしてるんだよ！

Dクラスとの試召戦争に勝った翌朝、オレは歩いて学校へ向かって

いる。

あゝ．．．．またあの『夢』だ．．．。気分悪い．．．。

オレの頭にあの【笑顔】が浮かぶ。あれから3ヶ月か．．．。

「おはようなのじゃ、悠介！」

お、木下だな。

「ああ、おはようきのし．．．。」

アレ？何この違和感？．．．ああ、なぜに名前呼びなんだ？

「何を戸惑っておるのじゃ？お主は昨日ワシ等と一緒に戦ってくれたのじゃ。だからお主はもうワシ等の仲間じゃ。仲間なら名前で呼び合わんとな」

「そ、そうか、じゃあ．．おはよう秀吉」

きのし．．．秀吉の言葉に少しむずがゆい感覚を覚える。なんか恥ずかし．．

ガララッ

秀吉と一緒に登校し、教室のドアを開ける。あれ、設備が変わってない。まあ坂本になにか考えがあるんだろ。

「あ、おはよう悠介」

「おう明久か。昨日は災難だったなオレたち・・・」

「そうだね。でも悠介が雄二も巻き込んだおかげで胸がスツとしたよ！いいザマだね雄二は」

「まったくだ」

どれどれ坂本はつと・・・チツ、元気に登校してやがる。

「おい坂本。新婚生活は楽しめそうか？」

「火坂・・・テメエやつてくれたじゃねえか・・・」

ん！？オレの警報ブザー発動！教室の出口確認！オツケー！

「おい須川！こいつ朝秀吉と登校してきやがったぞ！」

『『『なに！』『』』』

わ！なんだ！？昨日も見た黒覆面の集団に囲まれた！

「おい！なんだその鎌は！どっから出した！」

『諸君、ここは何処だ？』

『『最後の審判を下す場だ！』『』』

『異端者には？』

『『死の制裁を！』』

『男とは？』

『『愛を捨て哀に生きるもの！』』

『よろしい。ではこれより異端審問会を始め……！火坂が逃げたぞ！捕まえろ！』

くっ気づかれたか！こうなったら仕方ない！

「坂本が朝黒髪美人と親しげに話してた」

『坂本を殺せえー！』

よし、身代わり成・ガシッ。

ん？

「悠介……秀吉と一緒に登校つてのは本当なの？」

くっ、明久か！だいたい秀吉は男だろ！確かに可愛いけどオレにそ  
ちの趣味はない！

「くそっ、こうなったら！」

パリン！

窓から脱出したるわ！ふっ、バカどもの姿がどんどん上がって……

・あれ？ここ三階だっけ・・・・・・・・・・あゝ忘れてた。

とりあえず午前授業が終わって昼。午後はBクラスと試召戦争だから昼飯で力をつけよう。え？なんで生きてるかって？根性かな・・・確かに下がアスファルトだとわかった瞬間は死ぬと思ったけど。

「食堂行こうか明久？」

「うん、いいよ。僕も今日はソルトウォーターあたりを」

お前はいつも何をエネルギー源にして生きてるんだ？

「あ、あの。皆さん・・・・・・・・」

「ん？なんだ姫路？」

「あ、あの、お昼ですけど、昨日の約束の・・・」

「おお、もしか弁当かの？」

「は、はい！迷惑じゃなかったらどうぞっ」

はいアウト！超警級の危険が迫ってる感覚が！鳥肌が止まらない！

「迷惑なもんか！ね、雄二！悠介！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「あ、ああ。それより場所を変えないか？」

「そうじゃな、せつかくのご馳走じゃし、屋上でも行くかのう」

とりあえず場所替え提案で時間を稼ぐ。

「そうだな。それなら俺がジュース買ってくるからお前らは先行つててくれ」

「あ、それならウチも行く！」

坂本と島田が売店に向かう。

「僕らも行くのか」

「そうですね」

どうする・・・まだ何が危険なのかわからない以上行動のしようがない・・・。

「あ、シートもあるんですよ」

あ、いつのまにか着いてるし。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

姫路が弁当の蓋を取る。

「「「おおっ！」「」」

ふむ、見た目は普通だな。……オレのサイレンの故障ってこともあるのか？

「あつ、ずるいぞムツッリーニっ」

ムツッリーニがエビフライを手に取り口に運……。。

「……………（パク）」

ボタン　ガタガタガタガタ

痙攣しはじめた。

明久  
s i d e

僕の目の前でムツツリー二が激しく痙攣している。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

思わず顔を見合わせる僕ら。

「（今のどう思う？）」

「（どうって明らかにあいつの料理だろ・・・・何入れて作ったんだ・・・・・・・・）」

「（食べたら命の保証はできんのう・・・・・・・・）」

姫路さんにこんな弱点があったなんて・・・・・・・・何とか姫路さんを傷つけずにこの場を回避しないと。

「姫路・・・調味料には何を使った？」

「（悠介！そんなことを聞いてどうするのさ！なおさら食べられなくなるかもしれないよ！？）」

「（大丈夫だ明久。死にたくなかったらオレに任せろ）」

流石悠介！この場を回避する方法を考えついたんだね！一応この場

の状況をまとめると・・・

1 生き残るには料理を食べるわけにはいかない。

2 しかしせっかく料理を作ってくれた姫路さんを傷つけるわけにはいかない。

と、こんなところ。僕には雄二に無理矢理食べさせるとかしか思いつかないなあ。悠介はどうするんだろう？

「はい、調味料ですか？」

う、なんか聞かない方がいい気がする・・・。

「えっと、まず防腐剤に硝酸カリウムを・・・」

「姫路、これは食べ物とは言わん」

悠介！2番はどうしたんだあー

！

悠介 side

姫路に思ったままのことを言う。明久・・・そんな怖い顔をするな・・・。もしお前が姫路と結婚したらお前は毎日この劇物を食べなければならんだぞ？

「えっ！？何ですか！？」

「硝酸カリウムってのはもともと料理に使う物じゃない」

「そんなことはありません！あれを入れることで長持ちして、お弁当でも美味しく頂けるんですよ！」

「長持ちとかその前に人体に影響がないか考えろ！」

ああ・・・姫路の常識人キャラがどんどん崩れていく・・・。秀吉・・・二人でなんとか頑張っという・・・。

「よお、ジュース買って来たぞ。お、これ姫路のか？どれどれ・・・」

坂本・・・気の毒だがお前には姫路を説得するための材料になってもらう。

「どうした火坂？そんな哀れむような目で俺を見・・・んゴパッ！」

坂本は白目を剥いて倒れた。

坂本・・・さらば！

「ちょっと坂本！？いきなりどうしたのよ！？」

「姫路、これでもお前の料理は安全だというのか？」

「さ、坂本君は足が吊っただけです！」

なにに！？認めないだと！？こんだけの物的証拠があるのに！・・・  
坂本。お前の死は無駄死にだったみたいだ・・・。

「明久君も食べてみて下さい！」

「え！？僕！？」

「ちょっと待て姫路」

ん？明久が救われたような顔をしている。すまん明久・・・そういうことじゃないんだ・・・。

「明久に食べてもらって、明久が無事だったらお前のは料理と認めよう。それでどうだ？」

「ちょっと待って悠介！僕を犠牲にする気！？」

明久・・・オレも命は惜しい！

「わかりました。明久君！さあ！」

「むじおっ！？」

ボタン！      ガタガタガタガタ！

さて、保健室に運びますか。

## 第九問（後書き）

評価をしてくださった人がいて感激です！ありがとうございます！

後、悪いところ、もっとこうした方がいいところとかがあったら感想で指摘して下さいと嬉しいです！

## 第十問

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？試召戦争のか？」

「うん」

復活した坂本、ムツツリー二、明久らと一緒にこれからの試召戦争について話し合う。お前らよく生きてるな……。あの後姫路から詳しく聞いたら、王水をつくる化学式が完成していたことは誰にも言っていない。しかも王水飲んで生きてる人間は初めてだ……。人体にはまだまだ不思議がいっぱいつてか？。初めてといえば料理で王水を完成させる人も初めてだけど。

「相手はBクラスなの？」

「ああ、そうだ」

そういえば坂本に聞いたがDクラスには設備の交換の代わりにBクラスの室外器を破壊させる約束を取り付けたい。何に利用するかはオレにはまだわからない。

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんだろう？」

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てない」

まあ無理もないだろう。Aクラスのトップ10人は全教科がこの前

のオレの化学並みにある化け物どもだ。まあこの前のオレの化学も過去最低点数だったか。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

いや、違うな。坂本も戦力差ぐらいは把握してただろう。

「BクラスもまたAクラス戦のための材料にしようってことか？」

「まあそういうことだ。クラスだと差がありすぎるから、一騎討ちに持ち込む。それにBクラス戦が必要だということだ」

「Bクラスをどう使うのさ？」

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「え？えーっと・・・」

「設備がワンランク下がるんだろ？」

「そうだ。つまりBクラスならCクラスの設備になるわけだ」

「そうだね。常識だね」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

いや別に負けたときの気持ちは聞いてない。

「相手クラスと設備が入れ替わるんだよ。・・・おい坂本、ペンチを何に使うつもりだ」

「まあそういうルールだ。そして今回はそれを利用する」

「なるほど？BクラスにAクラスを攻めさせて、Aクラスに脅しをかけ一騎討ちに持ち込むってことか？」

「まあそつだな。かなり要約されて明久が理解できてないが」

「オレが後で説明しとくよ」

「え！？何で僕が全くわかってないことがわかつ・・・ちよつと悠介！その哀れむような目はやめてよ！」

明久のバカさは限界が見えん。

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行つて宣戦布告してこい」

「絶対に嫌だ」

「心配ないぞ明久」

「なんでさ悠介？相手はこの雄二だよ？」

「Bクラスには美少年好きが多いからな」

「そっか。それなら安心だねっ。それじゃ行ってくるよ」

「ああ……お前の顔の良さがほんの少しでいいから頭にいけばよかったのに……」

「悠介なんか嫌いだっ！」

そのあと明久がボロボロになりながら帰って来たのは言うまでもない。

「よし、行つてこい！目指すはシステムデスクだ！」

『『サー、イエッサー！』』

坂本の指示でFクラス軍が一斉に突撃する。ちなみにオレは参加せず、この場で坂本の警護及び次の作戦の準備中だ。

「坂本、あいつらは大丈夫か？」

「問題ないだろ。主な対決教科は数学。隊長である姫路は数学は腕輪持ちだ。まず負けることはない」

腕輪とは400点をオーバーすると召喚獣につく装備であり、個々の特殊能力が

ガララッ

誰だ？オレいま説明中だ空気よめ。

「Bクラスの船橋だ。Fクラスに使者としてクラス間交渉に来た」

Bクラスの使者？なんかの策略か？レベルはそっちが上なんだから正攻法でくればいいのになんでまた・・・

「・・・・・・・・内容はなんだ？」

「四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する、だ」

四時までに決着がつかなかったら明日に持ち越し？・・・・・・・・姫路頼りのFクラスからしたら姫路への負担を減らせるこの協定は悪い話じゃない。でもそれでBクラスにはどんな利点がある？気は抜かないにしても最下位クラスとの試召戦争なんて速く終わらせたいはず・・・・・・・・なんか嫌な予感がする。

「いいだろう、協定を結ぶ」

「そうか、じゃあ調印をするから新校舎の空き教室に来てくれ」

「わかった」

坂本は承諾したか・・・まあ丸々信じているわけではなさそうだが・・・

「（坂本、どうするんだ？畏の可能性も十分あるぞ？）」

「（分かっている。身代わりになる程度の護衛は連れて行くつもりだ。一応お前も来て、俺の護衛にまわってくれ）」

「（わかった）」

そうしてオレたちは新校舎へ向かう。教室をほとんど空にして・・・

「Fクラスの坂本だ。協定の調印をしに来た」

「やっと来たかFクラス代表。不意打ちでも恐れてこないのかと思  
ったぜ」

Bクラス代表はあの根元恭二なのか？こいつが評判通りの男なら、  
この協定やはり裏がありそうだ・・・

「（おい坂本、嫌な予感がするからオレは教室に戻る。ああいう奴  
は手段を選ばない感じがする）」

坂本の返事も聞かずにFクラスの教室に走る。あそこにはFクラス  
全員の私物があり、それが狙われる可能性があるからだ。

ガラッ！

息を切らしながらFクラスの教室にたどり着き、勢い良くドアを開  
ける。

「なっ、何だお前！」

予想通りか。たくさんの折られたシャープペンシルや鉛筆が散乱す  
る中、二人組の男が誰かのカバンをあさっていて、手には何か手紙  
のような物を持っている。

「残念だったな。目的の物はもう手に入れたんだ。おい岡田、これ  
を根元に持って行け！こいつは俺が片付ける。木村先生！藤沢浩介  
が物理勝負を申し込みます！」

「え？あつ、はい。承認します。」

「試獣召喚！<sup>サモン</sup>！」

「くっ……試獣召喚！<sup>サモン</sup>」

ちょうど廊下にいた木村先生が立ち会いになる。やってることが教室破壊なんだから、何も知らせずに廊下に配置させたのだろうか？手紙を持ったやつを追いたいがここで召喚獣をださなければ戦死扱いになってしまう。受けて立つしかない。

『Bクラス                      藤沢浩介                      物理                      324点』

三百点台か……。やはり木村先生がいたのは偶然じゃないな。普通の教科じゃ全くなわなない点数だ。でも

「へっ！このオレが物理勝負で負けるか！」

「確かにいい点数だ。でも    オレには絶対に勝てない」

『Fクラス                      火坂悠介                      物理                      427点』

オレの点数が表示されるとともに藤沢の目が見開く。バカめ！物理も超得意科目だ！もちろん400点を越えているので、召喚獣は腕輪をしている。え？なんでそんな高得点な教科があるのにFクラスかって？そんなの決まってるじゃないか……。他教科は明久以下だ！

「腕輪持ちだと……。そんなバカな……」

「どうした、かかってこないのか？お前が物理が得意なのは相手も知ってたんだろ？ならお前への援護に来るのも遅くなる。それにひきかえここはFクラスの教室、五分もすればみんな帰ってくる。囲ま

れる前にオレを倒し・・・いや、倒された方がいいんじゃないか？」

「だ、黙れ！負けるのはお前だ！食らえ！」

藤沢の召喚獣がオレの召喚獣めがけて突っ込んでくる。こんなに激昂してくれる相手は本当にやりやすい。

『凍結』！

オレが腕輪のキーワードを口にすると召喚獣の周りの召喚フィールドに青い円が広がり、その中にいた藤沢の召喚獣の動きがとまる。

「な、なんだ！？何が起こって・・・」

「なんてことはない。腕輪の能力だよ」

オレの腕輪の能力・・・『凍結』。召喚獣の周りに青い円を発生させ、その円の中にいた敵を凍らせ動けなくする能力だ。発生させる円の大きさは自由で、半径の長さ×10点を消費する。つまり3メートルなら30点消費といった具合だ。そして動けなくなった敵は・・・

「殴り放題ってことだ」

がん、がん、がん、がん。

教室に鈍い音が響き、藤沢の召喚獣が消滅す「戦死者は補修！」鉄人早っ！まだ倒して五秒もたっていないよ！あいつも雑魚キアラ特有の捨て台詞とか言いたいんじゃないのか！？ほら！なんか言おうとしてるけど・・・あーあ・・・連れて行かれた。

さて、どうしようか・・・

「なに！？どうしたの悠介！？」

「明久？戻ったか。協定の調印に行ってる間に教室が荒らされてな」

「うわ・・・本当だ・・・。でもこれぐらいなら雄二がなんとかしてくれるよ」

「シャープや鉛筆なら大丈夫だろう・・・。でも厄介なことをされた・・・」

あの手紙が・・・あいつらがあさってた鞆は・・・。。。。。。。それに手紙のデザインの感じ・・・。。。。。。。

「姫路のラブレターが盗まれた」

## 第十一問

「明久……姫路のラブレターが盗まれた」

「えっ！そ、それってどういうこと！？」

「さっきBクラスの奴らが来て姫路の鞆をあさって、手紙みたいな物を持っていったんだ。外側のプリントから察するにラブレターで間違いないと思う……。姫路を封じればFクラスなんて敵じゃないからな」

「そんな……。くそ！」

「おい待て明久！今行っても意味がない！返り討ちにあうだけだ！オレたちにはできることはこの試召戦争に勝って根元から取り返すしかないんだ！」

「……。そうだね。今熱くなくてもしょうがない。試召戦争に勝つことを考えるよ……」

「だが姫路は弱みを握られる以上戦闘には参加できない。姫路なしとなると坂本ともう一度相談して作戦を練り直すしかないな」

「俺を呼んだか？」

「あ、雄二」

「坂本、いいところに来た。もう4時になるから戦争は終わりだろう。これからの作戦について話さないといけないんだ」

「なんだ？何があつた？」

「姫路さんを戦線からはずしてほしいんだ」

「……なんでだ？」

「理由は言えん。とにかく頼む」

「そうか……だが作戦に変更はない。だから姫路のやる予定だった任務をお前らがやれ」

「姫路の任務か？」

「ああ、できるか？」

「うん！やってみる、いややってみせる！」

「それじゃあ頼んだ。他に何かあるか？」

「うん。根元君の制服が欲しいんだ」

「……お前に何があつたんだ？」

「えっ？あ、あっ！」

「……つたく今はシリアスな場面だろうが。坂本、理由は聞くな。オレからも頼む」

「まあ……それはなんとかしてやろう」

本当に明久は爆弾発言を繰り返すよな……。自分が言うことをちゃんと確認してから言わないと、そのうちすごい噂が立ちそうだ。

「・・・・・・・・（トントン）」

「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあったか？」

Fクラスの諜報係であるムツツリーニが報告にきていた。お前のその気配の消しかたは本当に怖い。

「・・・・・・・・Cクラスが怪しい」

「なに？Cクラスだと？」

「大方漁夫の利を狙うつもりだろう。いやらしい連中だ」

CクラスがFとBの勝った方に勝負を仕掛けるつもりなのか？てか坂本、いやらしい連中、だなんて他人に言うことはお前にはできない。

「Cクラスと協定を結ぶか。Dクラスに攻めさせるとか言って」

「それに、Cクラスは僕らがBクラスに勝つなんて思っていないだろうしね」

「よし、それじゃCクラスに行くぞ。秀吉、お前は別の作戦のこともあるから教室に戻ってくれ」

「ん、雄二がそう言うならそうするとしようかの」

秀吉を何の作戦に使うんだろう？秀吉には悪いがオレの秀吉イメージは

1、美少年

2、Fクラスの残りすくない常識人<sup>とくし</sup>

ぐらいのものだ。まあ演劇部のホープと呼ばれるぐらいだから演技が関係ある作戦かもしれない。なんて考えていると、

「吉井。アンタの返り血こびりついて洗うの大変だったんだけど。どうしてくれんのよ」

島田と須川が帰ってきた。お前らはさっきの試召戦争で何をしていたんだ？返り血なんてそうそう日常会話で出てくる単語じゃないぞ・

「それって吉井が悪いのか？」

オレもそう思う。

「あ、島田さんに須川君。ちょうどよかった」

明久、お前の目の前で返り血と言ってる奴に笑顔で話しかけるのはおかしい。あと島田とは縁を切った方が身のためだと思う。まあ人数は多い方がいいが。

ガラッ

「Fクラスの坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

坂本が教室のドアを開くなりそう言う。

「私だけど、何か用かしら？」

するとオレたちの前に長い黒髪の女子生徒が歩いてくる。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふうん・・・」

ん・・・なんかおかしい。この違和感・・・

「どうしようか根元くん？」

根元？このシュチュエーションで根元ってことは・・・あーはいはい。

「当然きやつ「逃げるぞ坂本！教室まで走れ！」おい！人の話は最後まで聞け！」

「ね、根元君！なんでこんなところに！？」

「明久！今はつべこべ言ってる場合じゃない！とにかく逃げるぞ！」

このままじゃ協定違反と言われて攻撃を仕掛けられる。もともと戦力が違うし、雄二がやられたらこれでオレたちの負けになってしまう！

「長谷川先生！Bクラス芳野がFクラス代表に」

「させるか！Fクラス須川が受けて立つ！試獣召喚<sup>サモン</sup>！」

「すまん須川！ここはたのんだ！」

須川が身代わりになる。須川にはすまないがここは須川を置いて逃げるしかない。

「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

背後から根元の声と複数の足音が響く。音から察するに四人・・・  
・姫路は試召戦争で数学で戦ってたから数学の点数は下がってるだろうから、坂本以外の全員で戦っても勝ち目は薄い。

「はあ、ふう・・・」

「姫路、大丈夫か？」

やっぱり体力的にきつい・・・。

「あ、あの、さ、先に・・・行って、ください・・・」

姫路が言う。しかしここで姫路を失えばFクラスは負けるだろう。  
ここは・・・

「雄二！」

「なんだ明久！」

「ここは僕が引き受ける！雄二は姫路さんを連れて逃げて！」

あゝあ。オレが言おうとしたセリフを……。まあ姫路からしたら明久が言った方がいいか。さて・・・オレも……。あれ？この前のテスト数学は何点だったっけ？テストの結果の用紙は……。あった。

『火坂悠介 数学 24点』

「明久、オレはパスだ！足手まといになる自信しかない！」

「え？あ、うん別にいいけど」

「じゃあウチがのこるわ。数学は得意だし・・・」

「悪い！ここは頼んだ！」

明久と島田を置いて逃げる。え？女の子を身代わりにして恥ずかしいか？残念ながら島田はオレの『女の子』カテゴリーに入っていない。オレの知ってる女の子はあんな凶暴性はない。

「ちよつと火坂？ウチなんかアンタを殺さなきゃいけないような気がするんだけど？」

「気のせいだ！」

ふう、マジでびびった。この学園、人の心を読む奴が多い気がする。

「坂本、あいつらは大丈夫なのか？」

置き去りにしたオレが言うことではないが、心配そうにしている姫路をみて思わず坂本に言う。

「もちろんだ。他の奴らならともかく、あいつならなんとかなる」

「？　なぜそう思う？」

「勉強ですべてが決まるわけじゃないだろ？」

「まあ、それはそうだが・・・」

あいつが不安なのはむしろ勉強以外のところでもあるんだが・・・。

「あいつもだてに『観察処分者』

なんて呼ばれてないってことだ」

「あー、疲れたー」

「よ、吉井君！無事だったんですね！」

戸を開けて明久と島田が帰ってきた。すごいな、どうやら生還し・  
・

「うん。これくらいなんともいであつ！」

どうやら明久はまた島田の機嫌をそこねたようだ……。そして  
いくらなんでも、好きな奴の爪先を踏み抜く島田は二度と『女の子』  
カテゴリーに入れる気はない。

「し、島田さん。僕が何か悪いことでも……」

「（キッ！）」

「あ、いや、美波」

ん、なんか名前呼びをしてるらしい。なんで名前呼びになった後の  
やりとりがこれなんだろ……。

「あ、そうだ。悠介、ちょっといい？」

「ん？なんだ？」

明久に呼ばれ廊下に出る。

「姫路さんのことだけど、なんで僕に相談したの？」

んゝ姫路がお前を好きだから、なんて言えないしなあ。

「お前が適役だと思ったからだ」

「僕が？でも雄二の方がよかったんじゃないの？」

「何でだ？」

「え？だって、その、姫路さんが・・・」

「お前もしかして姫路が坂本を好きとか思ってるんじゃないだろうな？」

「え？違うの？」

「・・・いや、お前がそう思ってるならそれで良い・・・」

オレの目の前で最強のバカはまだ頭の上に？マークを浮かべていた。

## 第十二問

「昨日言っていた作戦を実行する。」

Bクラスとの試召戦争二日目の朝、坂本がオレたちにそう告げる。

「作戦？でも開始時間はまだだよ？」

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

CクラスはBクラスとFクラスの漁夫の利を狙っており、やはり手をつつておく必要がある。

「あ、なるほど。それで何をすんの？」

「秀吉にこれを着てもらおう」

坂本がそう言つて鞆から取り出したのは女子の制服。どうやって手に入れたかはさておき秀吉に女子の制服を着せるらしい。

「それは別にかまわんが、ワシが女装してどうするのじゃ？」

え？かまわないの？それは男としてどうなの？

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

秀吉の姉はそっくりなうえにAクラスの生徒であるらしく、AクラスとしてCクラスに圧力をかけるつもりらしい。

「と、いうわけで秀吉。準備をしてくれ。」

「う、うむ……」

坂本から着替えを受け取り、生着替えを始める秀吉。あれ？男の着替えなのになんでこんな見ちゃいけないような感じがするんだろう……。隣で明久は顔を赤く染めており、ムツッリーニはすごい速さでシャッターを切っている。

「よし、着替え終わったぞい。ん？みんなどうしたのじゃ？」

「さあな、俺にもよくわからん」

「おかしな連中じゃのう」

おかしいのはお前の容姿だ！

「んじゃ、Ｃクラスに行くぞ」

「うむ」

「あ、ちょっと待って。僕も行くよ」

「オレも行く」

オレに秀吉、明久、坂本の四人でＣクラスへ向かう。しかし秀吉の女装姿になんか引つ掛かるものを感じる。オレは女装姿なんて初めて見たし、そっくりとか言う姉の方も見たことはないはずだが……。

「さて、ここからは一人で頼むぞ、秀吉」

まあAクラスの使者に成り済ます以上、オレたちがついていって怪しまれるだろう。ここからは秀吉一人ということになる。

「あまり気がすすまんのう……」

そりゃあ姉のふりをして他人を騙すんだ、いい気はしないだろう。

「悪いな。とにかくあいつらを挑発してAクラスに敵意を抱かせる必要があるんだ。お前ならできる」

「はあ、あまり期待はせんでくれよ……」

気が重そうな秀吉。

「（おい、坂本。秀吉は大丈夫か？あのテンションなら失敗するかもしれないぞ？）」

「（大丈夫だ。秀吉を信じろ）」

「（信じろっていったってな……）」

秀吉がため息をつきながらCクラスの教室に向かう。本当に大丈夫だろうか？

ガラッ！

「静かにしなさい！この薄汚い豚ども！」

心配したオレがバカだった。なんだその切り替わり様は？てかお前の姉貴ってそんなこと普通に言うの？

「な、なによあんた！」

「話しかけないで！豚臭いわ！」

自分から話しかけてそれはないだろ・・・

「アンタ、Aクラスの木下ね！ちよつと点数いいからっていい気になってるんじゃないわよ！何の用よ！」

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女たちなんて豚小屋で充分だわ！」

「なっ！言うに事欠いて私たちにはFクラスがお似合いですって！？」

どうやらCクラス代表の中では豚小屋＝Fクラスらしい。

「手が穢れてしまうから本当はいやだけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの」

ム力つくものいいだな・・・。オレがCクラス代表だったら秀吉の顔に五寸釘を打ち込んでるところだ。

「ちょうど試召戦争の準備もしてるみたいだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから！」

そう言い残してCクラスの教室を出てくる秀吉。なんだそのすつきり

とした顔は？

「これでよかったかのう？」

「ああ。素晴らしい仕事だった。」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

まあたしかにいい仕事はしたと思うがお前はそれでいいのか？なんでオレはなにもやってないのにこんな罪悪感を感じないといけないんだろう……。

「作戦も上手くいったことだし、俺たちはBクラス戦の準備を始めるぞ」

「お、おう」

「ドアを上手くつかうんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛び、Bクラスの教室付近で戦闘が繰り替えされる。坂本は、『敵を教室内に閉じこめろ』という指示を出している。元々の作戦は姫路が根本の近くの敵を引きつけ、室外機を破壊させることで開けっ放しになった窓からムツリー二と大島先生が突入。彼の最強科目であるという保健体育で根本をしとめるらしい。しかし姫路は昨日からの予定通り今日は戦争にさんかしていないので、オレたちが根元の親衛隊を引き離さなければならない。

「さて明久、どうするんだ？」

「うん、僕もずっと考えてたんだけど、今いい作戦を思い付いたよ」

「ほう、どんなだ？」

「まず、

」

NO side

「・・・お前本当にやるのか？」

「うん。悠介から見たらバカでしょうがない作戦かもしれないけど、僕にはこれぐらいしかできないしね」

悠介たちが話しているのは放課後の誰もいないDクラスの教室。Bクラスの隣に位置する教室である。

「それじゃあ遠藤先生、お願いします」

遠藤先生の英語のフィールドが展開される。

「試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

明久の物理干渉能力を持った召喚獣が現れる。そして

「行けっ！」

ドンッ！

「ぐっ！」

明久の召喚獣が壁を思いつきり殴る。当然フィールドバックもついて

いるので、痛みのあまり明久がうめき声をあげる。全ての痛みが帰るわけではないが、鉄筋コンクリートの壁を殴る痛みは半端なものではない。

ドンッ！

「ぐわっ！」

それでも構うことなく明久は壁を殴り続ける。しかし明久の拳からはもう血が流れていた。隣で悠介はまじまじとその拳を見つめる。

「（なんで・・・・・・・・・・）」

ドンッ！

「（なんでそんなに他人のために頑張れるんだ？・・・・・・・・）」

ドンッ！

「（お前はそのラブレターが坂本当てだと思ってんだろ？）」

「ぐわっ！」

「（お前がラブレターを取り返してもお前の得することなんて一つもない。お前がづらい思いをするかもしれない。なのに・・・・・・・・）」

「だぁぁーっしやぁーっ！」

「（なんでお前もあいつみたいに簡単に自分を犠牲にすんだよ！？）」

「

ドゴオッ！

遂に壁が崩れ、中にいるBクラスの生徒数人が驚いたようにこっちを見る。その中に、

「くたばれ、根元恭二いーっ！」

Bクラス代表根元恭二の姿もあつた。

「遠藤先生！Fクラス火坂悠介が」

「Bクラス山本が受けます！試験<sup>サモン</sup>召喚！」

悠介が根元に直接勝負を仕掛けようとするが、近くの近衛部隊に阻まれる。

「は、ははっ！驚かせやがって！お前らの奇襲は失敗だ！」

もう安全だと思ったのか、明久たちを笑う根元。しかし彼は窓から入ってきた二つの人影に気づいてはいなかった。

「残念、チェックメイトだ根元」

ダンッ、ダンッ！

「……Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ………！」

「……Bクラス根元恭二に保健体育勝負を申し込む。  
試<sup>サモ</sup>獣召喚<sup>ン</sup>！」

ムツリーニの召喚獣が根元の召喚獣を一撃で切り捨てる。

こうしてBクラス戦は終結した。

## 第十二問（後書き）

どうも、作者です。

悠介は明久の行動が理解出来ない様子。他人のために頑張れる明久に悠介は何を感じていくのでしょうか？

## 第十三話（前書き）

どうも、作者です。

駅伝見ながら書きました。

今回は短めです。

## 第十三話

アレ？なにこれ、夢？

いや、夢じゃない。ちゃんと痛い。肘の関節あたりが……。

アレ？オレ、なんでこんなことになってんだ？

十分前

「あれ、悠介もう帰るの？」

「ああ、バイトがあるんでな」

Bクラス戦が終結し、坂本がなにやら根本を女装させようとし始めたのを見て、オレは気分が悪くなり帰ることにした。もちろんバイトも本当にあるし、一人暮らしであるオレにとってバイトは貴重な収入源であるため休むことはできない。

「そっか。じゃあまた明日」

「おう」

明久と別れ教室をでる。ここ三日間はいろんなことがあって疲れたな……。まああいつらと同じクラスにいる限り平穏な日々なんて望む方が無理という物だろう。

「あれ、秀吉？お前まだ女装してたのか？」

廊下で女子の制服を着ている秀吉に会う。こいつは本当に男と見られたいのか？

「何言ってるのよアンタ？アタシは木下優子よ！」

「え？あつ、すまん」

どうやら姉の方だったようだ。まったく胸が無いから秀吉と見間違

え・・・

「今なにかアタシに失礼なこと考えてないかしら？」

「いえ、全然」

また心読まれたよ・・・。なんで一日一回ペースで心よまれるんだ。

「勘違いして悪かったな。じゃっ」

ガシッ！

ん？腕がつかまれた。なんで女のはずなのに腕がびくともしないんだろ？最近忙しいオレの第六感も危険を告げているが、逃げようにも足が震えて動かない。

「『まだ』ってどういうことかしら？詳しく聞かせてもらえると嬉しいな」

「オレは腕の力を弱めてくれると嬉しいかな・・・」

オレの腕は既にミシミシといやな音を立てており、このままじゃ腕に新しい関節ができそうな勢いだ。

「あの愚弟はまた女装をしていたの？」

あーやっぱり秀吉ってちよくちよく女装してたんだ・・・。今日も女装にためらいがなかったからな・・・。

「ねえ、教えて？」

やばい、痛みのあまり意識がもうろうつとしてきた。オレはここで死ぬのかな……。こんな死に方嫌だ……。

そう思いながらもオレはその場で倒れ、意識を手放してしまうのであった。

「ん……」

「悠介？気がついたかの？」

「秀吉・・・ここは・・・？」

「保健室じゃ。お主が姉上に関節を決められ気絶したと聞いたので来てみたのじゃ」

そうか・・・痛みのあまり気絶したんだっけ・・・腕は・・・良かった。関節は増えてない。

「秀吉、お前は大丈夫だったのか？」

「うむ、ワシは姉上の関節技は受けなれておるからのう。このとおりじゃ」

あ、やっぱりやられるにはやられたんだ。

「あ、オレバイトが・・・電話しないと」

「バイト先なら俺が連絡しておいた」

そう言って入って来たのは西村教諭。なんで俺のバイト先まで知ってるんだろう・・・。

「そうですか・・・ありがとうございます。でも先生の顔は気絶から覚めてそうそうに見るものではないですね」

「お前は失礼という言葉を知らんのか！」

お礼を言ったのになんで失礼だなんて言うんだろう。

「いてて……悪いな秀吉、こんな時間まで」

「別にいいのじゃ。姉上の方こそすまんのう」

「お前も大変だな……」

ベットから起き、鞆をつかむ。とにかく今日は帰って早く寝よう、体力が持たない。

「ところで火坂、木下。FクラスはBクラスに勝ったそうじゃないか。どうだ？新しいクラスは」

「楽しくて退屈はせんもう」

「そうか、それは良かったな。火坂はどうなんだ？」

「しょうもないバカばつかで疲れます」

「まあお前はそうかもしれないな。学年一のバカもいるクラスだ。だがお前もそのうち慣れていくだろう」

「あのバカどもに違和感を感じなくなったらオレはもうおしまいですよ」

そう言いながらオレの頭にはあの学年一のバカの顔が浮かんでいた。あの決着のついた後の笑顔……。手を痛そうにしながらもオレたちに向けた笑顔……。どこかで見たことのあるような笑顔……。

「なんなんだろうな・・・」

帰りながら一人呟くオレがいた。

#### 第十四問（前書き）

どうも、作者です。

別にどうでもいいことですが作者は受験生です（オイ）。

勉強したくないです・・・・・・（笑）。

## 第十四問

No side

「ふああ・・・疲れた・・・」

Bクラス戦の翌日、悠介は一人で学校に向かって歩いていった。今日は朝からAクラス戦のための補給試験があるので、少し早めの登校である。

「（ああ、痛みは引いたけど、まさか夢にまで出てくるとは・・・」

昨日、優子に気絶するほどの関節技をかけられたショックは大きいようで、昨日は夢にまで優子が現れ快適な眠りにはならなかったようである。

「（ん？あれは坂本じゃないか？）」

前方にクラス代表の姿を見つけ、目を向けてみる。

「（ん、この前も見た黒髪の女子生徒と話してら・・・もしか

して彼女とか？もしそうだったら明久たちがだまっとなさそうだが・  
・・）」

そう思ったが、オレには関係ないか、と目を離しそのままFクラスの教室に向かうのであった。

悠介 s i d e

「まずはみんなに礼を言いたい。不可能と言われながらもここまで来れたのは、みんなの協力があつてのことだ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

壇上の坂本がFクラス一同に礼を言うと、明久は驚きの声を上げる。確かに今までのやりとりを見ると、明久が坂本に礼を言われる場面なんて想像もできない。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って勉強がすべてじゃないことを、教師どもに見せつけてやるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

みんなの気持ちに教育的にあまりよくない理由でまとまっている。やっぱりこの試験召喚システム生徒に悪影響を及ぼしてないか？

「みんなありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと思っている」

ああ、一昨日言ってた対Aクラスの作戦か？しかし何も聞いていないFクラスの面々は案の定驚いており、教室にはざわめきが広がっている。

「一騎打ちをするのは、当然オレと翔子だ」

「バカの雄二が勝てるわけなあっ！？」

危ねえっ！明久めがけて坂本が投擲したカッターが飛んできやがった！

「次は耳だ」

「僕と雄二は友達とはもう呼ばないよね？」

「坂本！」

「そうだよ悠介！人に平然とカッター投げるやつになんか言ってるよ！」

「明久を狙うならもつとしっかり狙え！危ないんだよ！」

「ちよつと！僕にカッター投げる行為に問題はないの！？」

え？別にない。

「すまんな火坂、お前も一緒に狙ったつもりだったんだが」

「殺す！あいつは殺す！」

「やめるのじゃ悠介！落ち着くのじゃ！」

仕方なくオレは手に持ったカッターをしまう。

「まあ確かに明久の言う通り翔子は強い。まともにやれば勝ち目はないかもしれない。だがそれはDクラスもBクラスも同じだったろう？まともにやれば俺たちに勝ち目はなかった」

確かに姫路がいたとはいえ、まったく実力の違う上位クラスに今まで勝ってきたのは他の誰でもない、坂本のおかげだろう。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今みんなにみせてやる」

『おおーっ!』

まあここまで言われたら坂本を疑う余地はない。坂本に任せてみよう。

「さて、具体的なやり方だが……」

坂本の作戦を聞くと、Aクラス代表である霧島翔子は日本史で必ず一つ間違える問題があるらしい。それをねらって小学生レベルの上限ありテストで勝負しAクラス代表を負かす作戦のようだ。

え？なんで短く要約したかって？作者がこの部分を書くのが面倒らしい。さばるな！作者！

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは……その、仲がいいんですか？」

たしかにさつきから坂本は霧島のことを下の名前で呼んでいる。この最下位クラスの代表と、学年主席が友達だとかはあまり想像できないな……。

「ああ、あいつとは幼なじみだ」

「総員狙え！」

あ、Fクラスが得意の嫌な団結力を発揮した。

「なっ！？なぜ明久の号令でみんなが急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前に貴様を殺す！」

「俺がいったい何をしたと！？」

お前の幼なじみの相手が気に入らないらしいよ。

「遺言はそれだけか？……待つんだ須川君、靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

男子高校生四十七人の靴下はどんな味がするんだろうなあ……  
あ、吐き気が。

「あの、吉井君」

「ん？なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……………」

「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢をとるの！？それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げよう

とするの!？」

島田はともかく姫路・・・何がお前をそこまで変えた・・・お前はもう立派なFクラスの一員だよ・・・さようなら姫路・・・

「まあまあ落ち着くのじゃ皆の衆」

秀吉が場を取り持つ。秀吉!Cクラスの時とかいろいろあったけどやっぱり常識人《オレの見方》はお前だけだよ!（泣）

「冷静になって考えるとよい。相手はあの霧島翔子じゃぞ?男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

『おお・・・そう言えば』

ああ、あれか?霧島翔子は男ではなく同性愛者で、女の子が好きっていう噂があったな。むしろこんな身近に同性愛者がいることに疑問を持たないお前らがおかし・・・いや、前言撤回。島田を見たら考えが変わった。

「まあとにかく、あいつは一度覚えたことは絶対に忘れない。俺はそれを利用してAクラスに勝つ。そうしたら俺達の机は・・・」

『『『システムデスクだ!』』』



## 第十五問

N O   s i d e

「上手く一騎打ちに交渉できるかなあ・・・」

悠介はAクラスの教室の外から、Aクラスへ戦線布告をしにいった雄二たちを見ていた。なぜ教室に入らないかという・・・

『一騎打ち?』

『ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む』

『・・・うーん、何が狙いの?』

Aクラスの交渉側が木下優子だからであつた。昨日彼女に気絶する程の関節技をかけられ、まだショックが消えてないのである。

「（まさかあいつがいるとはなあ・・・。あいつの姿が見えた瞬間誰にも見えないような速さで逃げしまった・・・。人間ってあんなに速く動けるんだなあ・・・）」

少々自分の限界を超えた動きに驚きを感じている悠介。交渉をしている場からはそれなりに近いので、その場で交渉の内容を聞いている。

「（しかし明久たちは本当に気づいてないなあ・・・。まさの方がありがたいけどさ）」

「ところで、Cクラス戦はどうだった？」

「時間はとられたけど、それだけよ。なんの問題もなし」

「Bクラスと戦う気はあるか？」

「Bクラスって・・・。昨日来ていたあの・・・」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はされなかったようだが、さてさてどうなることやら・・・」

「（坂本は作戦通りに交渉できてるみたいだな・・・今のところは順調だ。・・・てかさあ・・・みんなそろそろ気づいていないんじゃないの？一人いないじゃん！明らかに！Fクラスの貴重な常識人係が！）」

「それって脅迫？」

「人聞きが悪い、ただのお願いだよ」

「（明久！気付けよ！坂本が根本に見える・・・とかそういう目してないでいいから！それについては同意見だけれども！）」

「うーん、わかったよ。何を企んでいるか知らないけど、代表が負けるわけないからね」

「え？本当？」

『だって、あんな格好した代表のいるクラスと試召戦争なんて嫌なの』

「（秀吉！これは思わぬ収穫じゃ・・・とか思ってる顔はいいから気づいて！メンバーが一人足りないことに！）」

明久と秀吉の心を自覚なしに読みツツコミを送るが彼らは気づくことなく交渉に耳を傾けている。

「（ちよつと待てよ！オレいくらなんでもこの小説の主人公だぞ！？なんで主人公がいないのに誰も気づかないんだよ！ここで影薄いキャラつけてどうする気だ作者は！そんなキャラ福原先生で充分だろ！え？常識人キャラも秀吉だけでいい？じゃあオレの存在意義ってなんなんだよ！）」

作者は耳を貸さないのであった。

「（作者ああーーーーっ！さっきからのこのナレーターお前かよ！ていうかオリキャラと作者が絡んでどうすんだ！こんな二次創作じゃねえだろ！最初らへん話の駄文しか書いてないお前はどこにいったんだ！）」

ガラガラッ

「何してんの悠介・・・？」

「あ・・・」

悠介 s i d e

「まったく、ドア開けたら悠介が頭抱えてブツブツなにか言ってたからびつくりしたよ・・・」

「ああ・・・すまん・・・」

オレが自分の存在に悩んでいる間に明久たちはAクラスとの交渉を終わらせたようで、今はFクラスに戻っている途中である。

「なんで教室に入ってこなかったのさ？」

「いや・・・まあいろいろとあってな・・・ははは」

「明久……それは聞かんでやってくれるかのう……」

オレの事情を知ってる秀吉がフォローをしてくれる。もうこのクラスじゃ常識人〃苦勞人になる流れがありありと見えるよホントに……。ああ、オレの台詞の・が占める割合の多いこと……。

さて、場面は変わってAクラス。え？場面がわりが早い？ホントごめんな……この作者どう続けるか思いつかなかったそうだ。

「さて、両者とも準備はよろしいですか？」

Aクラス担任かつ学年主任の高橋女史が生徒たちに声をかける。彼女が今回の立ち会い人だ。

「ああ」

「問題ない……」

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシからいくわ」

そう言つて前に出てきたのは木下姉。そしてオレが素早く身を隠したのはいうまでもない。

「Fからはワシが行こうかのう」

さて、Fからは秀吉か……。純粋な点数勝負じゃ相手にならないからいかに木下姉の集中力を乱せるかが勝負の鍵に……

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

あ、なんかやばい。

「はて、だれじゃ？」

「じゃあいいわ。その代わりちょっとこっちにきてくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするのじゃ？」

秀吉！逃げて！危ない！あの目は危ない！オレに関節技をかけた時もそんな目をしてた！

『姉上、勝負は……どうしてワシの腕をつかむ？』

『どうしてアタシがCクラスの人たちを豚呼ばわりしていることになってるのかしら？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して……あ、姉上っ！ちがつ……！その関節はそっちに曲がら……』

ガラガラガラ

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりにそこで隠れてる火坂君出してくれる？」

「だそうだ、火坂。ご指名だぞ」

「嫌だ！なんでオレ！？」

「あなたのせいでAクラスの木下の関節技はヒトを気絶させるほどの威力があるって噂が流れてるのよ。さて、どう責任をとってくれるのかな？」

「それ噂じゃなくて真実……ああっ！やります！喜んで相手させていただきます！」

危ねえ！また関節増加の危機に晒されるところだった！

「そう、残念。科目はどうするの？」

「か、化学で……」

うう・・・こうなったら勝ってこの関節美少女を補習室送りにするし  
か・・・・・・・・・・ない！

「それでは、始めて下さい」

「サモン試獣召喚！」

## 第十六問（前書き）

今回は話の関係上短めです。

## 第十六問

「サモン試獣召喚！」

掛け声と共にオレと木下姉の召喚獣が姿を現す。

『火坂悠介	Fクラス	化学	478点	VS
木下優子	Aクラス	化学	322点』	

「え・・・？ちよつと美波、悠介の点数Dクラス戦の時よりさらに上がってない？」

「100点ぐらい違うわね・・・」

「ちよつと！なによアンタその点数！アンタFクラスでしょ！」

「Fクラス所属でも得意教科と不得意教科ぐらいあるんだよ、Aクラスの優等生さん」

「くっ・・・でもアンタその点数の教科があるのにFクラスってことは・・・」

「まあそこを突かれると痛いが・・・」

500点に近い点数にその場の全員が驚いた顔をしているが、木下姉に他の教科の点数を見破られてしまった。ああ、皆の視線が痛い。

「やつぱり所詮はFクラスね。叩き潰してやるわ！」

木下姉の召喚獣がランスを構え、オレの召喚獣目掛けて突っ込んで

くる。

「そう焦んなって・・・よいしょっと！」

オレの召喚獣は柄の部分でランスを受け止める。腕輪を使えば確実に動きを止められる距離だが・・・

一腕輪使って一《動きを止めて》一発殴ってもいいけど、それじゃ面白味に欠けるな・・・。やっぱり最後に点数が減って動けない相手に思いつきり渾身の一撃をぶちこんでやりたい・・・この前のお礼も込めてなアハハ。相手も接近戦タイプだし、操作もなれてないみたいだからいけんだろアハハハハにやけが止まらん。

「ねえ美波、悠介がなんか嫌な笑みを浮かべてるように見えるんだけど気のせいかな？」

「かなり嫌な笑顔ね・・・何考えてるのかしら・・・」

オレは私的な理由で腕輪を使わず、嫌な笑みをうかべながら鏢迫り合いを続ける。しかしオレの方が点数が高いので、当然鏢迫り合いは優勢になり、ついに木下姉の召喚獣を押しきった。

「く・・・うわっ！」

「あんたバカか？点数が自分より高い相手に鏢迫り合いして勝てるわけないだろ・・・おらっ！」

ガキイツ！

槌で殴り付けるがAクラス相当の頑丈な鎧のせいかなダメージは点数差のわりに大きくはない。

「命拾いしたな、優等生くん」

「誰が命拾いしたですって！？Fクラスごときが偉そうな口をきくんじゃないわよ！」

「そう怒って突っ込んでくるとな・・・隙だらけなんだよ」

木下姉召喚獣の動きに合わせて槌を振るう。

ドカツ！

『Aクラス 木下優子 182点』

「そんな・・・」

「これで仕上げだ。『凍結』！」

「う、腕輪！？」

オレは腕輪のキーワードを唱え、青い円を発生させる。円の範囲内にいた木下姉の召喚獣は凍ったように動かなくなり、オレの召喚獣はゆっくり近づき、槌を振り上げる。チェックメイト！

「補習室行きおめでと・・・ぐっ！・・・」

止めを刺そうとした瞬間、オレの視界がいきなりグルグルと回り、オレは頭を抱える。

「あ．．．ぐうつ！」

「ちょ、ちよつとどうしたのよアンタ？」

「い、いや．．．なんで．．．も．．．」

なんだ．．．？視界がボンヤリとしてき．．．あ．．．意識  
が遠く．．．

バタリ

誰かがオレを呼んだようにも思えたが、オレの思考はそこで途切れ  
た。

## 第十六問（後書き）

どうも、作者です。

主人公はなんか他人と接してる時は普通なんですが、自分一人で考え事しているとなんかおかしくなっていってますね……。暴走します。

## 第十七問（前書き）

どうも、作者です。

今回は自分の文才のなさに泣きそうになりました・・・。

## 第十七問

「悠介、今日の晩飯は何だと思う？」

「さあ、知るかそんなもん。だいたい高一の息子に聞くもんじゃねえだろ……。」

「つれないなあ。昔はあんなに嬉しそうに答えてくれたのに」

「いつの話をしてんだクソ親父。だいたいオレはあいつが作る料理なんて食いたくねえよ」

「そんなこと言うんじゃないまったく。今はお前の母親なんだ、少しは心を開いてみたらどうなんだ？」

「無理な相談だ」

オレの実際の母親は二年前に病死している。今は父と再婚した血のつながらない母、つまり継母がオレの家に居座っている。

「何がそう嫌いなんだ？もつと若いお母さんが良かったのか？」

「ちげえよ……。」

あいつのオレを見る目を見た日から、オレはあいつを好きになることなんて出来なかった。あいつがオレを見たときの目……。それは新しい息子を見る目でもなければ、家族を見る目でもない。その目には……。ありありと『嫌悪』が浮かんでいた。

「なんでなんだろうな……」

「ん？なんか言ったか？」

「別に……」

父から顔をそらし右を見ると、公園で子供が元気に遊んでいる。ああ、あのころはなあ……こうして今母がいないことも、代わりに嫌な奴が家に居座ることも知らなかった。まあ知らなくて良かったし、知らない方が幸せだったろう。

コッソ

そのときオレの足に何かが当たった。立ち止まって見てみると、公園での遊びに使われていたであろうサッカーボールが転がっている。そして車道を挟んだ公園の入り口には、ボールの持ち主らしき男の子がこちらを見つめていた。

「どうやらあの子の物らしいな。悠介、返してやれよ」

「わかってるって……ってオイ！」

男の子はボールが持っていていかれると思ったのか周りも見ずにこっちへ走ってきた。しかしその横にはトラックが……轢かれる！

「危ないっ！」

「親父ッ！？」

親父が男の子の元に突っ込んだ。でもどう見ても助けて逃げるには

時間が無さすぎる！

「オイ！なにやって」

「悠介！」

親父が男の子をオレの方に投げる。

「お前はどうす」

オレが見たのは・・・何も答えずただ笑った・・・笑った親父の姿だった。

ドオン！・・・

・・・何やってんだ？

・・・何がしたかったんだ？

・・・子供は助かってもお前が死んじゃあ意味ないだろ・・・。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
何笑ってんだ？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
何で笑ったんだ？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
何が？

「  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
何が面白えんだクソ親父イーーーーっ！」  
」

どうしたんだろう・・・

火坂君は保健室に運ばれ、対戦相手だったアタシがベッドによこわ  
たる火坂君を看ていることになった。

「・・・な・・・も・・・し・・・んだ・・・」

さつきから悪夢でも見ているのか、なにやらブツブツと呟いている。  
そしてその呟いている顔が・・・なんだか・・・とても寂し  
そうに見えた。

・・・悪夢でも見ているなら起こしてあげた方がいいかな・・・  
。

そう思つて揺り動かそうと手を伸ばしたとき、突然火坂君がムクリ  
と起きた。ふと顔を見ると、目にはうつすら涙が浮かんでいる。

「あ・・・気がついた？・・・」

「・・・」

火坂君は何も喋らず、一人にした方がいいかと立ち上がろうとした  
とき、

「なあ・・・」

「え？・・・何かしら？・・・」

「他人を助ける事ついていいことだと思うか？」

「え・・・そりゃまあいいことだと思うけど・・・」

「それで自分が犠牲になってもか？」

「え・・・」

「オレの父親・・・半年前に交通事故で死んだんだ・・・」

「・・・」

「近くでトラックに轢かれそうになった子供を助けてな・・・」

「・・・」

「別に親父が間違ったことをしたとは思ってない。親父死ななければ、子供が死んでいたとは思う」

「・・・」

「でもな・・・ム力つくんだよ・・・」

「・・・何が・・・？」

「・・・あの野郎、死ぬほんの直前にこっち見て笑いやがったんだ・・・。何がそうかもしれえんだよ！そんなに死ぬのが嬉しい

のかよ！残されるオレはどうでもいいのかよ……」

「……………」

「オレにはわからなかった。なぜそんな簡単に他人を助けて死ねるのか。なぜ親父は笑ったのか。なんで……そんなに簡単にオレの前から消えてしまえるのか……」

「……………」

「アンタはどう思う？」

「……………アタシにだってわかんないわよ……。アナタのお父さんには……彼には何か……護りたいモノがあつたんじゃないかしら……」

「……………」

「その……自分の命より大切なモノが……」

「……そうか……やっぱりわかんねえな……」

「アタシだつてよくわかんないわよ……急にそんなの聞かれたつて……ねえ……なんでアタシに話したの？」

「……特に理由はないかな。……今すぐ誰かに話さないと不安で押し潰されそうだった。……そして目覚めて最初に会ったのがアンタだった。それだけだ」

「……そう」

「変に重い話して悪かったな。忘れてくれ……………。」  
ラスにもどろろぜ……………」

「ええ……………」

## 第十八問

はあ……。赤の他人にいきなり自分の過去を暴露してしまった・・。

木下姉と一緒にAクラスに戻りながら、オレはさっきまでの行動を後悔していた。

やっぱりまだ自分の中で整理がついてないのか……。でも木下姉に話したことで楽になったのも確かか……。うん、気にしない方向でいこう。

「おう坂本、戦況はどうだ？」

「火坂か？お前……。」

「あー、オレは大丈夫だ。気にすんな。それよりどうなってるんだ？」

「そうか……。今は明久<sup>バカ</sup>が負けて一敗一分けになったところだ」

「え？オレの試合は引き分けなのか？」

「まあどう見てもお前の完全勝利だったからな……。高橋女史も考慮してくれたんだろ」

「そうか……。悪いなホント」

「気にすんな、本番はこつからだ」

どうやら坂本はここからでも勝利に持ち込める作戦らしい。まあムツツリー二と姫路がいるわけだし……。

「雄二、それは僕は計算に入れてないってこと？」

「おう明久、どんな死に様だった？」

「悠介も僕が負けたことは前提にしてるんだね？心配した僕の優しい気持ちを返せ！」

「まあまあそう怒るな。実際に負けたんだろ？」

「うん・・・まあね。でも次はムツツリーニだし大丈夫だよ」

「では三戦目を戦う人は、前に出てきて下さい」

「・・・・・・（スック）」

高橋女史の声に我らが寡黙なる性識者、ムツツリーニが立ち上がる。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからはショートヘアのボーイッシュな女の子が出てきた。なんか見たこと無い人だな・・・。

「一年の終わりに1 Eに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「あれ？1 Eって言ったたら姫路さんと悠介も同じクラスじゃない？どんな子なの？」

「私は面識ぐらいしか・・・」

「そつか、じゃあ悠介はしってる？」

「あつ、明久君、それは・・・」

「悪いな明久、オレは去年は後半の半年間学校出てないんだ」

「え？なん・・・聞かないほうが・・・？」

「いや、オレはかまわないが今話すような話じゃないからさ・・・」

去年親父が死に、継母が家を出ていってからオレは学校に通っていなかった。もともと独り暮らしをしながら学校に通えるはずがないし、オレも学校はやめて一人で生きていくつもりだった。もしそのままそうしていたら、オレは今こうしてコイツらと一緒に戦うこともなかったんだろうな・・・今となっては『あの人』に感謝すべき・・・かはまだわからないか。

「教科はどうしますか？」

「・・・保健体育」

「キミ、土屋君だっけ？保健体育が得意なんだってね？でもボクもかなり得意なんだ。キミと違って、実技だね」

あれ？保健体育の実技っていうと・・・変な妄想をしてしまふオレがおかしいんだっけ？

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

あ、やっぱそっちの意味であってるんだ？

「フツ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ!」

「そうです! 永遠に必要ありません!」

「・・・・・・・・・・」

ああ・・・明久、そんな哀しい顔をしないでくれ・・・・・・・・こっちまで哀しくなるから・・・。

「そっちの火坂君はどう? ボクと保健体育の勉強したくない? 実技で」

うわ、まさかのご指名! どどどどうしよう。ここは男らしく受けるべきだろうか?

「ちよっ! 愛子! 何いってんのよ! あんなの愛子の好きなタイプじゃないでしょ!」

「・・・・・・・・・・」

ああ、明久がどういう気持ちだったのかわかった・・・・・・・・わかったくなかった・・・・・・・・え? 泣いてんのかって? そんなこと聞くなよ・・・察してくれ・・・。

「あちゃー、あの子は優子の管轄だったかあ。それじゃあ仕方ないなあ」

「ちよつ、別にそういうわけじゃ・・・」

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はい。試獸<sup>サモン</sup>召喚と」

「・・・・・・試獸<sup>サモン</sup>召喚」

以前も見た二振りの小太刀を構えるムツツリー二の召喚獣に、工藤のセーラー服をきて巨大な斧を持った召喚獣が対峙する。

やっぱりAクラスは皆いい武器持っていていいなあ。オレもできれば刃物がよかったかも・・・。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリー二くん！」

工藤の召喚獣が腕輪を光らせながら、電光をまとった斧でムツツリー二の召喚獣を斬りつけた、その瞬間。

「・・・・・・加速」

「・・・・・・え？」

ムツツリー二の召喚獣の腕輪が光り、召喚獣の姿がブレる。そして、

「・・・・・・加速、終了」

工藤の召喚獣は一瞬で切り刻まれ、倒されていた。

『Aクラス	工藤愛子	保健体育	446点	VS
Fクラス	土屋康太	保健体育	572点』	

つよ……学年首席の平均点を軽く越えるぞ？……彼の性に対する知的好奇心は計り知れない……。

「これで二対一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

さて、Fクラスのエースである姫路瑞希が前に出ていく。

「それなら僕が相手をしよう」

「やはり来たか、学年次席」

んー、やっぱりAクラスからは久保利光か。もともと学年3位の實力だが、今回は科目の選択権が向こうにある以上、姫路が負ける可能性が科目によって出てくる。坂本もここは姫路頼みなみたいだな……頑張れよ……姫路！

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

総合科目か……。そこまで点数に変わりはないはず……。厳しい戦いになりそうか？

「それでは……」

『Aクラス	久保利光	総合科目	3997点	VS
Fクラス	姫路瑞希	総合科目	4409点	』

「何だと・・・」

オレは思わず驚きの声をあげていた。もともと同じぐらいだった点数を400点も離すなんて並大抵のことじゃない。しかも姫路はもともとすべての教科の点数が300点台・・・オレや明久たちが400点上げるのでは話が違う・・・。

「ぐっ・・・・・・・・姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

人の為に頑張れるFクラスが好き・・・・・・・・人の為に・・・・・・・・かあ。  
オレもそうなるんだろうか・・・・・・・・人の為に頑張れる人に・・・・・・・・。

「最後の一人、どうぞ」

「・・・・・・・・はい」

「おう」

そして最後の一戦。今のところ二勝一敗一分だが、勝利数が並んだ場合、大将戦に勝利したクラスの勝ちになるらしい。だからこの勝

負、勝つか引き分けて勝ちということになる。つまり坂本が100点を取った場合、Fクラスの勝利になるということだ。こんな有利な勝負はないだろう。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

坂本が作戦通りの教科を指定する。

「坂本！後は頼んだぞ！」

オレの声が聞こえたのか、坂本は親指を立て視聴覚室に向かった・・・。

《日本史勝負 限定テスト 百点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

《Fクラス 坂本雄二 53点》

え？なんでナイフを握りしめてるかって？目的は一つさ・・・。

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだオレたちに高橋先生が告げる。

高橋先生・・・そんなことはわかってるよ・・・。オレたちはそんなことを聞きに来たわけじゃない。オレたちは・・・

「・・・雄二、私の勝ち」

「・・・殺せ」

そう、坂本雄二の抹殺。ただそれだけだ・・・。

「良い覚悟だ、殺してやる！歯をくいしばれ！」

「神に祈る間をやろう・・・。」

「吉井君、落ち着いてください！」

「ちょっと火坂君！落ち着いてまずそのナイフをしまいなさい！」

「くっ、邪魔しないで！姫路さん！」

「木下姉、邪魔をするな・・・こいつは殺さなきゃいけないんだ」

「アキ、火坂、落ち着きなさい！アンタたちなら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

オレと明久の声がきれいにハモる。

「それなら坂本君を責めるんじゃないわよ！」

「くっ、止めるな木下姉！こいつは生かして返すわけにはいかないんだ！」

「あら、アタシの言うことが聞けないの？」

「え？・・・あ・・・ちよっ・・・」

「ちよーつと廊下に来てくれるかしら？」

「・・・・・・・・はい」

さて、オレが恥も外聞もなく大絶叫をあげAクラスに戻って来たとき、

「……雄二……約束」

「……………（カチャカチャカチャ）！」

「ん？なんだ約束って？ムツツリーニは何してんだ？」

全く話が読めないので、霧島の言う約束と、ムツツリーニの慌ただしい撮影準備の理由を明久に問う。

「あれ？そういえば悠介はいなかったんだっけ？」

「おお、理由はさっきのを見ればわかるだろう？」

さっきの血の惨劇を……。

「まあね……。あ、それで約束っていうのはね、霧島さんが僕たちに勝ったら一つ霧島さんの言うことをきかなきゃならないんだ」

「ふーん……………」

ああ、それで百合を期待してるってことか？でもまだ霧島が同性愛者だと決まったわけじゃ……

「……………雄二、私と付き合って」

ほらな、霧島は坂本が好きな・・・って、え!?

「やっぱりな、まだ諦めてなかったのかお前」

「・・・私はあきらめない。ずっと雄二のことが好き」

「・・・拒否権は?」

「・・・ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあつ!放せ!やっぱりこの約束はなかったことに・・・」

ぐいつ、つかつかつか。

180はありそうな坂本が首根っこをつかまれて連れていかれた・・・。  
どんな握力及び腕力トレーニングをしてるんだろう・・・。

「さて、Fクラスの皆、今から我がFクラスの補習についての説明をしようか?」

後ろから突然鉄人が来て意味不明なことを言い出した。は?我がFクラス?どゆこと?

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、担任が福原先生から俺に変わるそうだ。これから一年、死にものぐるいで勉強ができるぞ」

「」「なにいつ!?!」「」

「先生！それはあんまりです！そんなことをしたら、ただでさえ名脇役の臭いにする福原先生がもうほぼモブキャラのような存在になつてしまいます！」

「火坂、お前の心配どころはそこなのか？・・・まあいい、とりあえず明日からは授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

「は！しまった！補習が増えるんだった！」

「さあゝて、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は約束どおりクレープでも食べにいきましょうか？」

「え？美波、それは週末って話じゃ・・・」

「だ、ダメです！吉井君は私と一緒に映画を見にいくんです！」

「ええっ！？姫路さん！それは話題にすら上がってないよ！？」

はあ・・・明久は今月どうやって生きていくんだろ？まったく・・・そんなに幸せな状況にいるんだから食費の心配なんて今はするなよ・・・さて、一人者は一人寂しく、そして自由一人の時間を過ごそ・・・

「そういえば火坂君？アタシの悪い噂が校内に広がった件、あれはどう落とし前をつける気なの？」

・・・え？

「今ならもう一度関節技フルコースか、アタシにクレープを奢るか選ばせてあげる」

「・・・・・・・・奢らせていただきます」

金を選ぶか命を選ぶかみたいな選択指だろ……。

「に、西村先生！明日からとは言わず、補習は今日からやりましょう！思い立ったが仏滅です！」

「バカ、明久。それは吉日だ。西村先生！オレからもお願いします！今なら24時間ぶつ通しで勉強ができる気がします！」

「うーん、お前らにやる気がでたのは嬉しいが……」

「先生、先生がそんなにやついた顔なんてしてると普通に気持ち悪いです」

「お前はなぜ俺に対してだけそんな辛辣なんだ！……まあいい、今日は二人とも存分に遊べ。無理することはない」

「おのれ鉄人！僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！こうなったら卒業式には伝説の木下で釘バットを持っておまえを待つ！」

「それじゃあオレは桜の花咲く新学期、お前を登校早々罵倒してやる！」

「斬新な告白だなオイ。そして火坂、お前のそれは実行済みだろうが」

え？……あ、ホントだ。

「アキ！こんな時だけやる気を見せて逃げようって、そうはいかないからね！」

「吉井君！その前に私と映画ですっ！」

「火坂君？アタシから逃げようとしても無題だからね？」

くそ・・・回避は無理か。まあ今日はいきなり重い話もしちゃったし、足りないとは思っけどその詫びだと思えば・・・いいかな。ウン。

「やっぱりもう一回ぐらい技かけた方がいいかしら・・・」

・・・・・・とにかく、明久もオレも坂本も、今日は安らかには過ごせなさそうなことだけはわかった。

第十九回 オレと休日とお隣さん 前編

「・・・・・・・・ん・・・・朝か」

新学期が始まって最初の週末、オレは様々なことがあったこの週の週末を思いっきり家で休むことに決めていた。せめて土日くらい休まないとかのクラスでは生きていけない・・・・だがオレをそこまで憔悴させるクラスにオレは入ってしまったのだ。入ってしまった以上はそこで生きていくしかないだろう。

「朝飯どうしよう・・・・もう一回寝ようか？」

そういえば最近親父が死んだ時の夢を見ることが極端に少なくなつた。やはり誰かに言ってしまったことがオレを楽にしてんのかな・・・・でもいきなり赤の他人にあのことを話したのはまずかったか？・・・・迷惑だったかも知れないな。なんかそのうち埋め合わせをしないと。

「今の時間は・・・・と、まだ九時か、どうせ休みなんだし、今日は寝よ「ドン！」・・・・へ？」

ドン！ドン！ドン！

「なんだこの音？・・ああ、隣の住人か・・・・ったく、人の貴重な休日をなんだと思って「ドン！」るっせえなオイ！」

おっとついつい口調が変わってしまった。これは小説なんだから誰がしゃべってるかわかりやすいように口調はあまり変えちゃいけない。今は一人だからいいけどさっきの口調じゃ坂本と被る・・・・。

「・・・苦情でも言ってくるか？」

オレは起きたままの格好で隣の部屋に向かう。え？そのままでもいいのかって？いいんだよ別に。どうせこんな時間からバタバタやってる奴なんて変なおっさんに決まって・・・

「ハア・・・ハア・・・」

あれ？おっさんだ。いや正確言うとおっさんがオレの隣の住人の部屋を、ドアの隣の窓から息を荒くして覗いていた。・・・これはあれですか？いわゆる何？ストーキングを嗜む方ですか？変質者とか呼ばれる人たちの類ですか？

「オイ・・・あんたそこで何やってんだ？」

「えっ？あっ！これは違・・・」

「あつ、ちよつ、待てよ・・・」

オレが声をかけると、変質者Aは後ろを向いて逃げていった。追いかけて変質者Aは変質者BとCを呼んだ！・・・とかそういう感じになっても嫌だし、ここは気にしない方向でいこう。それよりオレの用があるのはこの部屋の住人だよ！人の睡眠を邪魔しやがって！

ドンドン！

このアパートにはベルがないので、ドアを思いっきり叩く。・・・早く出てこいよ・・・と思った次の瞬間、

シュガッ！

ドアの内側からナイフが突き出てきた。え？・・・ナイフ？いやいやいや！おかしい！オレは朝起きたら隣の部屋の物音がうるさかったから苦情を言いに来た。そしてドアを叩いたら・・・ナイフ・・・え？なにこれ、入っていいよっていうサインなの？そんな普通の返答でナイフ使う？

ガチャッ

「ああ、あの人じゃなかったんだ。いきなりナイフ投げてごめんね？」

そう言っ出てきたのは・・・背の小さい女の子だった。パツチリとした目に栗色の髪をベリーショートにしている。見かけは結構かわい方に入るんだろな・・・っていまはそれどころじゃねえ！

「いやいやいや！ごめんじゃねえよ！つかいくら木製の扉でもこの厚さのドアを貫通させるほど強くナイフを投擲できるアナタは人間ですか？」

「まごうことなき人間だよ・・・それで君は何の用で来たの？」

えーっと、オレは何の用で・・・あつ、そうだ。

「お前朝からドンドン何やってんだ？こっちの部屋に響いてくんだよ・・・部屋にゴキブリでも出たか？」

「あ、よくわかったね？朝起きたらゴキブリが三匹も部屋にいてさ・・・」

へえ、平気でナイフ投げるような女の子でもやっぱり虫は怖・・・

「全部踏みつぶすのに手間取っちゃったよ。うるさくしてごめんね

（二二）」

「え？・・・踏みつぶすつて、スリッパとか見あたんねえけど・・・なにで踏んだんだ？・・・」

「何つて・・・素足」

ああ、そうですか・・・あんなに音が響くような強さで、しかも素足でゴキさんを・・・。さて、

「ちょっと！なんでそんないきなり回れ右して逃げるのさ！」

「夢・・・これは夢だ・・・学校だけじゃなくて家の近くにも異常人物がいるなんて信じたくない！」

「ちょ、ちょっと！なんか困ってるなら相談にのるよ！？」

「お前が原因なんだよ！」

「あつ！そうだ！そういえば私がちょっと困っていることがあるんだけど、聞いてくれな」とにかくナイフとかそういうところから直していこう！」ちょっと！それにも訳があるんだよ！っていうか逃げないでつて・・・」

## オリキャラプロフィール

おおつきちよ  
大槻千代

性別 女      2      C 所属

身長 154?      体重 教えません!

悠介の隣の部屋に住んでいる女の子。元気で優しい子であるが、常識がいくつか欠如している悲しき少女。原作に出てくるだいたいの女の子と同様に意味不明に力が強く、上記のように文月学園の生徒であるが悠介は会った当初は気づいていない。家族はいるが本人の希望で一人暮らしをしており、バイトもしている。得意科目である数学は400点代をとるほど得意であり、逆に苦手としている英語はFクラス並に低い。他の教科はCクラスの平均程度。

第二十問 オレと休日とお隣さん 中編（前書き）

いつもに増して駄文ですが気長に見てくれたら幸いです。

第二十問      オレと休日とお隣さん      中編

「それで？困ってることって何だよ？」

結局オレはこの子から逃げ切れずに話を聞くことにした。え？そこから辺の女の子からも逃げられないのかって？この子の肩を掴んで引き留める力は女の子どころか人間の力の範囲を超えてるんだよ……。

「あ、うん。こんなところで話すのも何だし、私の部屋に来てよ」「ん？そうか……って待て！オレの部屋でいい！その……ホラ、近いし！」

素足で潰したゴキブリの死骸なんて見たくないし……。

「そう？それじゃ、おじゃまします」

「お、おう。とりあえず入れ……」

知らない男の部屋入るのに抵抗は無いのか？まあ今はその方がありがたいか……。

「男の人の部屋なんて初めて入るケド、結構きれいにしてるんだね？」

「ん、ああ。オレの場合は母さんがそういうの厳しかったからな……」

。。もう掃除とかが習慣になってんだ」

「ふーん……」

キヨロキヨロとオレの部屋を見渡す女の子。そう言えば名前聞いて無かったな……。

「さて、私が相談したいのは……と、その前に自己紹介からし  
ようか？」

「ん、まあそうしてくれ」

「じゃあそうする。ん……と、大槻千代おおつきちよです。よろしく！スリー  
サイズは上から……」

「いやいやいや！いいよ名前だけで！自己紹介でスリーサイズ言い  
出す人なんて初めて見たわ！」

「そう？……残念だなあ」

「たく、朝から何でこんなにツツコミ入れなきゃいけないんだ？だ  
いたい自己紹介でスリーサイズ言う人なんてうちの学校にもいな……  
……否定できないなあ……なんかいそうな気がする……」

「キミは？」

「ん？……ああ、火坂悠介。悠介だからユウ君って呼んでね……

……とかそういうのは特に無……」

「そう、じゃあよろしく、ユウ君」

今回ばかりは自分の愚かさを憎んだ。

「早速呼ぶか……まあいい、んで、相談したいことってのは  
なんだ？」

「ああ……実はね……ユウ君も来るとき見なかった？」

え？んーとオレが朝見た物は……

「ああ、もしかしてあのストーキングをたしなんでいらつしやるお方のことですか？」

「うん、まあそうなんだけど、なんかその説明の仕方勘にさわるね？」

精一杯の説明だったんだが。

「それでそのストーカーを抹殺したいと？」

「いや！そこまでする気はないから！わたしってどんなイメージ持たれてるの？」

朝からナイフ投げられりゃあそんなイメージも持つわ。

「要するにストーカーをどうにかやめさせてほしいと！」

「わかってるなら最初から協力してよ！」

うーん・・・お前が朝、家でしたことを言ってやればもう近寄って来ないと思うけど・・・。オレがストーカーなら極力近づかない。

「そうだな・・・彼氏でもいるなら見せつけて諦めさせるとか・・・？」

「あつ！それはいいね？早速やってみようかな？」

「彼氏いるのか？」

その彼氏は目か頭がおかしいのか？

「ううん、いないけど・・・」

ふう、良かった、そんな可哀想な人がいなくて。んでいないけど・・・

・何・・・？なんかめんどくさいことになりそうな予感が・・・。

「一日彼氏ぐらい、やってくれるでしょ？」

「はいアウト！それはオレにいろんな危険が降りかかることになりかねない！」

今日のオレは余計なことばっか言うなホントに！

「ええっ！？何でさ！？」

いやいやいや、そんなことしたらさつき会ってるオレはあのストーカーの目の敵にされちまうじゃねえか！ああいう人種が敵に回すと一番怖いんだよ！それに秀吉と一緒に登校しただけで半殺しにされそうになったのに、もし途中でFクラスの奴らに見つかったら・・・命はない・・・。

ゴクリ

「一体どうしたのさ？顔色が悪いよ？」

「大丈夫だ・・・まだ生きてるから・・・ああ、鼓動が聞こえるって素晴らしいことだ・・・」

「一体キミはどんな状況に置かれているの・・・？」

「ととととにかく！そんなことをしたらオレの命が危ない！だからこの話は無しって方向で」

「それで？手伝ってくれるんでしょ？」

え？話の流れおかしくない？

「いや、だから無理だつて」

「手伝ってくれるんだ？」

「ちよつと待て、なんで肘を掴むんだ？あとオレの肘は360度回るわけじゃないぞ？」

「手伝ってくれるんだ？」

「はい……」

僕はまだ死にたくないんです……。

「よし、それじゃあとであいつが来たら教え」

「それじゃあさ！今から遊びに行こうよ！」

「え？」

「だってホラ、彼氏と彼女なんだよ？休みの日ぐらい、一緒に遊びに行くのが普通じゃん！」

「オレは休みの日ぐらい家で休みたいけど……」

しかもさっきからのやりとりは彼氏彼女の力関係じゃないと思う。

「そんなこと言わない！いいでしょ？別に。わたし部屋戻って準備してくるね！」

「オイ！ちよつと待……」

あ、何？オレの周りにはこういう女ひとしかいないの？

「ねえねえ、ユウ君はどこに行きたい？」

「できれば家に真っ直ぐ帰りたいかな・・・」

「ふうーん、ユウ君はゲーセンに行きたいんだあ。うん！わたしも行きたい！」

「おーい、人の話聞いてる？」

この子はゲーセンより耳鼻科に行った方がいいと思う。

「ホラホラ！ぼーっとしてないで早く行こうよ！」

「わっ、腕つかんで走んな！自分で歩くから！」

あーああ・・・せつかくの休みがなあ・・・。

アタシの気持ちは今かなり弾んでいた。なぜなら……

「うつ……早く家に帰って読みたい……」

最近探していたBL本が手に入ったからである。あんまりコレ出回ってなくて大変だったのよね……

あーっ！早く読みたい！

『ホラホラ！ぼーっとしてないで早く行こうよ！』

『わっ、腕つかんで走んな！自分で歩くから！』

……あれ？今の男の人の声、なんか聞いたことあるような……？あの声は確か……。

「声はあっちの方から聞こえてきたわね……」

行ってみようかな？

「ユウ君、どれがやりたい？」

「どれでもいいーや・・・」 「もう！そんなかつたるい声出して！君が選んだやつならなんでもいいよ（キラーン！）とか言えないの？」

この人の中のカップルの定義ってどういうものなんだ・・・？オレには理解できん。

「どれっていつでもなあ・・・」

「あ！あのぬいぐるみカワイイ！」

そう言っただ槻が指を指したのはUFOキャッチャー。人呼んで百円玉回収機！

「大槻、お前あんなもんがやりたいのか！？あれはな、善良な小学生から姑息な手段を使って金を巻き上げる悪魔の兵器だぞ！」

「キミはゲームセンターにどんな思い出があるの・・・？」

あんな・・・二度とあんな経験はしたくない・・・！

「あれ？しかもなんで苗字呼びなのさ？今は付き合ってるんだから名前で呼んでよ！」

あー、それは言われるとは思ってたんだけどなあ・・・

「ん・・・なんか初対面なのに名前で呼ぶって・・・なんつーか・・・」

「なんつーか……何？」

「なんか……恥ずかしい……？」

この会話自体も相当恥ずかしい……！

「……ふふっ、意外とそういうところもあるんだね？ かわいいっ！」

「ぜんぜん嬉しくないからそれ……」

なーんかつっこみっぱなしで忙しいなあ……。休みの日ぐらいボケ担当に回りたい。でも別に悪い気はしない……。か。

「じゃあ呼び方はもう好きにしていいいよ。それより早く遊ぼう！」

「お、おう……」

「よお火坂、こんなところでなにしてんだ？」

げ……この声はまさか……

「坂本かよ……お前こそ何してるんだ？」

「翔子に寝込みを襲われてな。逃げ回ってる最中だ」

流石は学年主席、行動力も半端じゃない。

「お前はなんだ？ デートか？……こりゃあ須川たちが喜びそうだぜ……」「そうか。じゃあオレは霧島にお前の居場所を教えようかな。霧島が喜びそう」「すまん俺が間違ってた」……わかりやあいい……」

ふう、危ない。霧島に感謝しないと。

「それじゃあ俺は家に戻るか、翔子ももう家にはいないだろうし。」

お前はデートをせいぜい楽しめや」

「黙れ所帯持ち、これは違うつて言つてんだろぅが・・・」

「ユウ君？何してるのさ、早くこっちきてよ！」

坂本と別れて、遠くで大槻がオレを呼ぶ声がしたので声のした方に走る。いつの間にあんなどころまで行つたんだあいつ・・・

「・・・その人、ちょっと待って」

「ん？オレ？・・・つて霧島？」

「・・・あなたは確かFクラスの・・・」

「ああ、火坂だ。火坂悠介」

走っている途中で鬼のような霧島に遭遇した。試召戦争のとき以来だが、どうやらオレの顔を覚えていたようだ。それにしも凄いタイミングだな・・・坂本は命拾いか・・・。

「・・・雄二を見なかった？」

「家に戻るそうだ」

「・・・ありがとう。火坂はいい人・・・」

「どういたしまして」

悪いな坂本・・・オレはお前の命より霧島の幸せを応援させてもらおう。

あ、霧島に口止めすんの忘れた。

## 第二十一問　オレと休日とお隣さん

「ふう．．．ちよつと休憩．．．あ、わたしちよつと．．．」  
「ん？トイレか？」

「もうつ、そういうのはわかってても言わないものでしょ！」

「そういうもんか？じゃあオレこのベンチに座って待ってるから」  
「うん」

トイ．．．ゴホンゴホン、化粧をなおしに行った大槻を見送りながら、飲み物等が売ってあるコーナーのベンチに腰を掛ける。ふと建物内の時計を見ると、もう針は十二時を指していた。

ああ．．．もう一日の半分を過ごしてしまったか．．．明日は日曜なのにずっとバイトはいつてるしなあ．．．こんなに体力消費した状態であのクラスで一週間も生きていけるかな．．．？

「言つてて自分で怖くなるな．．．」

なんでこんなこと引き受けてしまったんだ．．．？やってもなんの得にもなりやしない、その上オレの身に危険が及ぶかも知れないのに．．．。

「でも．．．誰かの為に何かをするのって久しぶりかもなあ．．．」

別にそんな嫌な気分でもないし、まあやれるだけはやってやる．．．。

優子 side

「確かこっちの方だったような・・・？火坂君の声が聞こえたのは・・・」

結局アタシは聞こえてきた声の主が気になり、探して歩いていた。

「見つからないわね・・・アタシの気のせいだったのかしら？」

・・・っていうかだいたいなんでアタシが火坂君の声が聞こえたとしてもいちいち探さなきゃいけないのよ？そうよ、アタシには関係ないじゃない・・・

そう思って帰ろうとした時、

『もうっ、そういうのはわかってても言わないものでしょ！』

『そういうもんか？じゃあオレこのベンチに座って待ってるから』  
『うん』

あつ、見つけちゃった・・・あれ？もしかして女の子といる！？まさか彼女！？もしそうだったらどうしょ・・・ってアタシに関係無いじゃないそんなこと！・・・そうよ、アタシは火坂君に彼女がいようがどうでもい・・・

「あれ？木下姉じゃないか？」

「えっ！？あつ！ほ、火坂君！？」

うわっ！声かけられちゃった！どどどうしよう・・・

「なにしてんだこんなところで？Aクラスの優等生さんはお勉強はしなくていいのか？」

「な、なによ！アタシたちだって息抜きぐらいするわよ！アンタみたいに昼間っから彼女と遊んでる奴に言われたくないわ！」

「あー・・・さっきから見てたのか？」

「えー？あ、いや、その・・・偶然アンタが彼女といちゃついてるところを見ちゃっただけよ！変なこと言わないでくれる！？」

うう・・・なんでだろ・・・アタシ自分の発言に傷ついてる・・・？やっぱり彼女がいたなんて認めたくない・・・

さっきまでのやりとりを見られてたみたいだ・・・こんなこと学校で広められたら洒落にならないから早く誤解を解かないとな・・・。それにしてもさっきから木下姉の機嫌が悪い・・・なんか怒ってるんだけど同時にすらそうに見えるのは気のせいなんだろうか・・・？

「いや・・・別にいちやについてないしあいつは彼女なんかじゃないからな」

「え？・・・そうだったの？」

あれ？木下姉の顔がパツと輝いたぞ？・・・さては人に彼女がいないのを馬鹿にしてやがるな！？くそ・・・そんな救われたような笑顔をするな・・・！

「え・・・じゃあ今のは誰？答えてくれるわよね？」

「ん・・・と・・・」

あれ？・・・なんか普通の質問なのにすごい圧力を感じる・・・。なんであんな眩しいほどの笑顔をしてるのに黒いメラメラとしたものが見えるんだ・・・？答えの選択を間違えれば殺されそうな気がする。てかこれ今日二回目じゃね？

「どうなのよ？」

んー、さすがに今日会ったばかりなんて信じてもらえないだろうな・・・友達ってほどのつきあいもないし・・・強いて言うならお隣さん？

「お、お隣さん？」

どうだ！これなら当たり障りはないはず・・・。

「へえ・・・なんてただのお隣さんと二人っきりで遊んでるのかしら・・・？そこを詳しく聞かせて？」

「え？そこは別にどうでも」

「詳しく聞かせて？」

あ、やばいなこれ。まさしくMK5秒前だ・・・。  
くそ・・・大槻が行ったトイレはたしかあっち・・・。

「・・・ダッシュ！」

「あつ！ちよつと待ちなさい！」

「死ぬとわかってて誰が待つか！」

「さっきまでいた子は誰なのよ！？説明しなさい！」

走れ走れ走れ！捕まったら命はない！

「あれ・・・ユウ君？どうしたのそんな急いで」

「ちようどよかった！今は説明してる時間がない！とにかく逃げろ！」

「えっ？あつ、ちよつと待つてよ！」

「なんでそんなに親しい呼び方をされてるのよ！？とにかく説明を  
しなさい！」

「はあ、はあ、はあ．．．どうやら、撒いた、みたいだな．．．」  
「はあ、はあ、．．．もう、いきなり、どうし、たの？」

思いつきり走った結果、木下姉を撒いたようで振り返ると人の影はない。ふと前を見るともうオレと大槻が住んでいるアパートの近くまで逃げてきていた。人間の逃走本能つてすごい．．．。

「あ、あれ？も、もう帰って来ちゃったんだね？もつと遊びたかったんだけどなあ．．．」

「別にいいだろ？もともとの目的は」

「ち．．．千代ちゃん？．．．その．．．男．．．誰？」

「あ．．．」

声がした方を向くと、朝と同じおっさんがオレを指さしながら、オドオドした様子で大槻に話しかけて来ていた。

「もともとの目的は．．．こいつを追っ払うことだろ？」

「うん．．．まあそうなんだけど．．．」

「その男は誰だ！？おい、お前！気安く千代ちゃんに話かけるんじゃない」

「ねえ、ストーカーさん？もうわたしの家の周りをうろついたりしないですっていったよね？気持ち悪いからやめてって」

あ、もうそこまで言われてるんだ・・・それでも近づいて来るって  
すげえ執念だなオイ。

「あ、いや、これは・・・」

「わたしもうこの人と付き合ってるの。だからもう諦めてくれない  
？」

そう言っただ概はオレの腕にしがみついて来た。絶対に今の状況を  
だれかに見られませんように・・・。

「え・・・そんな・・・うそだろ・・・？」

「ホントだよ。ねっ？ユウ君？」

「お、おう大つ・・・千代？」

さすがにここは名前呼びの方がいいだろう。より信憑性を持たせる  
ことができる。さて・・・ストーカーさんの反応は・・・

「・・・・・・・・・・ね」

「あ？」

「死ね！」

「うわっ！」

なんて奴だ・・・いきなりナイフを構えて突っ込んできやがった！  
なんでオレと会う人はみんなそういう危険物持ち歩いてんだ！

「おい大槻！お前警察連絡しろ！あとたぶん救急車も  
「はい、これ」

そういつて逃げていきながら大槻がオレに渡したのは・・・  
スタンガン（四十万V）

「なんで！？何！？いつもこういうの持っていないオレがおかしいの  
！？オレが間違ってた！？」

「死ね！」

「うわつと！」

また突っ込んできた男のナイフをかわす。なんかまだつつこみたい  
ところはいつぱいだけど、今はこいつに集中しよう。四十万つつう  
と服の上からでも効くはず・・・よし！

「（チラッ）やれ！坂本！」

「なに！？仲間」

「済まん、はったりだ」

相手が振り返った隙に腹に蹴りを入れる。だが少し浅かったようで  
男はさらに怒ってナイフを振り回した。そこでもう一度間合いを取  
り、男の後ろを見ながら、

「やれ！坂本！」

「またはったりだろ」

「はいよ」

「！？ぐわっ！」

今度は本物の坂本が男の腕をひねりナイフを奪う。そしてオレが近  
づき、

「はい、おやすみなさい」

バリバリバリ！

「ぐう……」

スタンガン発動でミッション成功 いやーホント危なかった・・・坂本が来てくれて助かったよ・・・まあなんで来たのかくらい推測できるけど・・・

「よお坂本、さては霧島に居場所を教えたのはオレだと推測して報復に来てやがったな？まあ今回はそのおかげで助かったわけだが」  
「チツ・・・まあそのとおりだ。仕返しに来たのにまさか助けることになるとは思わなかったけどな」

「それなら今から復讐したらどうだ？」

「バカ言え、スタンガン持つてる奴に丸腰でかかっていけるか。お前への復讐はとっておくぜ。それに・・・彼女さんが待つてるだろうしな？」

「だから違うつて言ってるんだろ・・・ああもうお前のにやけ顔をぶつ飛ばしたい！」

「やったねユウ君！すごい格好良かったよ！」

「ん？いやほとんど坂本が退治したようなもんだろ（ニヤニヤ）オイ！坂本！絶対そのにやけたツラぶつ飛ばしてやるからな！」

坂本は最後までニヤニヤしながら立ち去って行った。

「あ、さっき手伝ってくれた人だね？知り合いなの？」

「いや何でもない」

ただの抹殺目標だから。

「さあもう部屋に帰ろ．．．それとこのスタンガン、ちょっと貸してくれないか？」

自分の部屋の前まで歩きながら大槻に聞いてみる。これがないと来週は生きていけない気がするんだ．．．。

「うん、別にいいよ。予備もあるし」

予備も持つてるんだ．．．何の用で持つてるんだろう？おっともうオレの部屋の前だな。

「それじゃ、今日はこれで。もう朝からうるさくしたりすんなよ。そしてナイフを投げる時は相手を確認してから投げてくれ．．．これはマジだ」

「．．．え？あ、うん、わかったよ．．．今日は本当にありがとう！じゃあねっ」

そういうと大槻は走って立ち去り自分の部屋へ駆け込んでいった。ちよつと上の空だったけどオレの話聞いてたのか？最後はマジのお願いなんだが．．．。

ありがとう．．．か。なんだろうこの感じは？嬉しい．．．のか？まあまんざらではないな．．．。

「部屋の鍵は．．．と、あつた」

ポケットから鍵を出し鍵穴に入れる。今日は面倒な日だったけど気分は悪くないな．．．さあ早く休も．．．

あれ？作者、オチはどうした？オチがないとつまらん作品がさらにつまらなく

ガシッ！

あれ？木下姉に腕を掴まれた幻覚が見える。

「なんで逃げたのかまで説明してもらっわよ？」

メキメキメキ

あー・・・そういうオチでしたか。・・・なんで坂本にしるこいつにしる知らないはずのオレの家に普通に來てるんだ？

オレが気を失う直前に思ったのはそんなことだった。

## 第二十二問（前書き）

なんか文字数が話によつてばらばらですが温かい目で見守って下さい・・・。

## 第二十二問

オレがFクラスの一員として過ごし始めてからはや一ヶ月。次第に暑さを感じ始めるようになってきた今日この頃。

文月学園では『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

様々なクラスが創意工夫を凝らし準備に活気づく……そんな中オレたちFクラスでは……

「来い！明久！」

「勝負だ、悠介！」

「お前の球なんかお前の顔面にピッチャー返ししてやる！」

「いや！それは危ないから止めて！っていうかさつきからセンター方向の打球が多いのってそのせい！？」

皆で仲良く野球をしていた。

いやゝ、皆仲良くなったなゝ……オレもこういうことに抵抗を感じなくなったあたり少しヤバイかもしれないが……。まあオレ野球大好きだから止める気はないけどな！

バッターボックスに入り明久を見て構える。そろそろサインが出る頃だろう……。悪いな雄二、そのサイン盗み見させてもらっぜ！

『次の球はカーブを』

カーブか。意表を突かれると厄介だが、待っていればどうということとは

『バッターの頭に』

「雄二！それは競技的におかしいと思う！野球はそんな怖いスポーツじゃない！」

「おいおい火坂、サインを見るなんて反則じゃねえか」

「そんなサイン出すお前に言われたくないわ！」

ホントにこいつは友達なんだろうか？

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

「ヤバい！鉄人だ！」

鉄人が校舎から凄い勢いで走ってくる。捕まったら鉄拳で顔の面積を7倍ぐらいにさせられてしまうだろう。

え？逃げなくていいのかって？大丈夫だ。こういう時に貧乏クジを引くのは大抵

「吉井！貴様がサボりの主犯か！」

明久だから。

親交を深めると共にこいつらのパターンも読めてきたところでもあるのだ。

「雄二です！クラス代表の雄二が野球を提案したんです！」

お、明久が雄二に罪を擦り付けたぞ？雄二はどうする・・・ん？さっきのサイン？

『フォークを      鉄人の      股間に』

「何？明久のフオークは股間までしか落ちないのか？」

「悠介！ツツコミどころが全然違う！Fクラスにツツコミ役が少ないのはわかるけど投げやりにならないで！」

明久の指摘が凶星なのは内緒だ。

「全員教室へ戻れ！この時期になってもまだ出し物が決まっていな  
いなんて、うちのクラスだけだぞ！」

鉄人の恫喝が響き、オレたちはさらに設備が落ちているボロ教室へ  
また連れ戻されることになった。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃ  
いけない時期が来たんだが」

「ござに座るオレたちを見下ろしながら雄二がようやくHRを始める。」

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

面倒くさそうな雄二。どうやら学園祭とかそういうものに興味がないのだろう。かくいうオレもそういう感じなわけだが。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

雄二が島田を実行委員に指名する。オレも島田に一票だ。

「え？ウチがやるの？うん……、ウチは召喚大会に出るから、ちよつと困るかな」

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

「え？私ですか？」

「明久、姫路には悪いが無理だ。こういう時には恐怖政治の方がスピード的に効率がいい」

「そつか。姫路さんだとちよつと優しすぎるかもね」

「火坂？それはどういう意味よ？それにアキも普通に納得してるんじゃないわよ！」

「え！？最初に言っただのは悠介じゃ僕の肘関節が不吉な音をつ！？」

島田に制裁を食らう明久。島田……どういう意味かと言われれば、今のお前の行動を理由にしたい。

「まったく……。それにね、瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

「学校の宣伝みたいな行事なのに。二人とも物好きだなあ」

明久の言うとおり、今回行われる『試験召喚大会』は、召喚システムを世間に宣伝するための企画である。

ちなみにオレも出ようかな・・・なんて思ってたりする。

「あらら、姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「姫路が怒る？そんなのほとんど見たことないぞ？」

「だって、みんなのことを何もわかってないのに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？許せませんっ」

「姫路、残念ながらFクラスのみんなはバカだ。」

お前は料理にしろ何にしろ現実をしっかり見据えろ。

「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

成る程・・・島田はともかく姫路が出るんじゃないや相当ましなパートナーと組まないとなあ・・・。Aクラスの知り合いは皆そんなに詳しくないし、アイツと組んだら出る意味がないし・・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0481y/>

---

バカとテストと洞察眼

2011年11月23日14時28分発行